目次

我國の現狀と民衆教化（時言）……本多日生
一、憂ふべき現狀……二、一切の根源……三、慢を去つて敬に就け……四、不易の法道……五、西洋文明の失脚……六、東洋文明の眞價……七、安定せざる學說……八、惟神道の精要……九、儒教の精要……十、佛教の精要……一一、現社會の救濟……一二、結論
危險思想に對する警戒……本多日生
國民の覺悟……大迫尙道
佛教信仰の正統……本多日生
信仰と道德……村井日成
日蓮上人教義綱要……本多日生
私の婦人觀……安西千賀夫
記事、報道十數件

第廿四年十月號

謹告

時代の要求に鑑み、本部の爲め貢獻仕り度今回統一團名古屋市外八幡村字五女子大正座に於て、總裁本多日生猊下の親臨を仰いで、大講演會を開催仕候條、大方の同志諸君に於ては何卒祝辭又は祝電を寄せて本分會の前途に聲援を與へられ度茲に統一誌上に於て報告仕候也

大正九年八月　日
名古屋市外八幡村字野立林寺太郎方
統一團名古屋支部
南部分會創立事務所

思想の惡化善化

正しき理解と信念

本多大僧正撰

法華經要文

一部金六錢百部以上五錢の割送料一部金貳錢

一部金六錢百部以上金五錢の割送料一部金貳錢

一部定價金參拾錢並製金五拾錢上製金壹錢送料

本多日生著書一覽

○法華經心髓　壹圓參拾錢
○日蓮主義の運用　金壹圓八拾錢
○聖訓要義　卷一、二、三、四、五既刊、壹部金壹圓七拾錢　卷六壹部金參圓
○開目鈔詳解語　上卷一部　金貳圓
○日蓮主義の初步　金貳圓貳拾錢
○東洋文明の權威　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓八拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓貳拾錢
○日蓮聖人正傳　金壹圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金壹圓貳拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓八拾錢
○日蓮主義の綱要　金壹圓貳拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金壹圓八拾錢
○國民教化　金壹圓八拾錢
○法幢　金壹圓八拾錢　各送料八錢
○戰士の伴侶　上卷下卷各一部金貳圓八拾錢送料金貳拾四錢
○法華經講義　一部金參圓貳拾錢送料一部十八錢半年齡金送料不要
○大藏經要義　既刊
購讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

伊勢國四日市市安樂寺建立淨財勸募之辭

寺は精舍なり、人心を清淨ならしむること、米を精白にするが如く、又寺は功德林なり、この處に詣ずる者は功德を成就すること、園林に入つて華果を採收するが如く、復寺は金剛道場なり、この處に詣づる者は金剛不壞の佛身を成就す、經に云く、佛寺を建立する處は、其地皆金剛より成り、異滅の變あること無しと、今茲に伊勢の國四日市市に於て、法華經の正義を尊重する信男信女等、心を協せて一寺を建立せんとす、幸に靜岡縣下に存する久根の安樂寺を移して、其寺號を襲用せんとす、安樂寺は醍醐法皇の建立にして由緒正しき梵刹なり、建立の計畫已に成つて將に造營に着手せんとす、希くば隨喜の諸氏この擧を贊助し淨財を喜捨し、以て發願を成就せしめられんことを

維時大正九年九月

發願人 本多日生
國友日斌
山路元吉
兒玉小治
佐藤元良
服部柳隆

寄附金勸募要項

一、敷地　金五千圓也
一、本堂兼庫裡七拾坪　金壹萬圓也
一、工事着手　大正九年拾月
一、寄附金は東京府品川町妙國寺、名古屋市新榮町常德寺、又は四日市市新丁向山路方統一團分團宛申込及納付ありたし、

山路元吉寄附

時言

我國の現狀と民衆敎化

本多日生

目次

一、憂ふべき現狀……二、一切の病源……三、慢を去つて敎に就け……四、不易の眞道……五、西洋文明の失歸……六、東洋文明の眞價……七、安定せざる學說……八、惟神道の綱要……九、儒敎の綱要……一〇、佛敎の綱要……一一、現社會の救濟……一二、結論　以上

一、憂ふべき現狀

今日我國の現狀を觀察するに、日本人は全體として、人生觀の根本の思想が、頗る淺薄になつて居る、又個人としては人格の修養を怠つて居るのであります。個人の權利を主張し、利益を要求することは盛になりましたけれども、自己の人格を完成しやうとする努力が缺けて居るのである。又家庭に就ては我國從來の美風が次第に衰へて、親子兄弟の間も夫婦の間もその情愛が薄らぎつゝあるのは、爭ふべからざる事實であります。又社會一般に就ては歷史的に發達したる良風美俗が頽れて、新たなる弊害が起つて居るのである、甚だしきは善良なる社會を呪ふ人、破壞せんとする人すら出來て居るので、社會

に害毒を流す人は次第に多くなつて、社會を建設的に進めやうとする、社會奉仕の心懸が發達をして居らない。又國家の事に關しては三千年間養ひ來つたる忠君愛國の觀念は、日を逐うて薄らぎつゝあるかの如く見える、その甚だしきに至つては國家の組織を呪ふ者すら、間々見受けられるのである、斯くして我國の國家の存立は、その基礎を危うするとまで、政治家に依つて唱ばれる今日に至つて居るのである。

而して他面には政治上の趨勢を見ましても、徒に黨派の軋轢が昂まり、政權爭奪の欲望が昂まり、互ひに相罵り、相害ひ斯くて政治の本義に逆ざかり、國家の大事に關しては之を顧みざるかの如き有樣が見えるのである。憲政の本義に就ても、選擧界の事は諸君の御承知の通り、頗る腐敗を極めて居る、殆ど買收に依らずしては當選し得られないといふことは、公然の秘密の如くなつて居るのである、選擧投票が金錢に依つて賣買せらるゝ以上は、立憲政治は全然價値なきものである、所がどの議員も表面と裏面の違ひはあらうが、投票を買收せずしては殆ど當選の望みがないといふやうな事が、全國――都會も郡部もすべてそれが當り前かの如く看做されて居るのである、之に依つても政治界の腐敗は頗る明かなことである。又經濟界の狀態は、富を得たる者はその富を濫用して、所謂富豪の跋扈といふか、成金風といふか、成功したる者の態度は社會に害毒を流すやうなことが往々に見受けられる。富を得ざる者は怨みを懷いて所謂階級戰爭を叫び、或はストライキ、或はテロタージュをやつて資本家に戰ひを挑むやうになつて居る、總ての商工業者又は勞働者の觀念といふものは、唯だ金あるを知つて、而してそれ以上の理想を有たない人が頗る多い譯である。又教育上の事に就ては、無論教育の効果は多大なるもので、今日教育に從事せられて居る人人の努力は、眞に感謝に堪へぬことでありますけれども、一方から見ますれば教育の缺陷が現はれて、即ち唯今申すやうな諸種の弊害が起つて居るのである。又宗教界に就て見ますれば一方には舊き宗教は實際の感化力を失ひ、形式の寺院、僧侶、信者は殘つて居つても、それが民心を教化する實力は何程ありやといふことになると、頗る少ないやうに見受けられるのみならず、その中には諸種の弊害も伴うて、却つて宗教の名に依つて人心を腐らすやうなこともあるのである。又新らしいと云ふ方には迷信の風が盛んになつて、頗る不健全なる信仰が蔓延して居るのである。斯の如く舊き宗教は効力を失ひ、新たに興るものは殆ど迷信ならざるはなしといふやうな狀態である。而して日本の宗教の多數を占めて居る佛教各宗の夢は未だ醒めないやうに思はれる、軟弱感化の方法に於ても、又僧侶の觀念に於ても、洵に小さな所に引掛つて、眞に宗教の本領に向つて努力する人が割合少ない譯であります。その他軍隊に就ても、青年將校の思想が從前の軍人のやうにない、一般兵士の考へも次第に軍紀を守ることも薄くなり、軍人精神も枯れて來るといふことを耳にするのであります。さうして一般婦人の方には贅澤の風が中々强くなり、一般男子の間には放蕩の風が盛んになり、或は株式、相場といふやうな事に向つて手を出すのは當り前かの如くなつて、その利益の觀念も頗る不健全に陷つて居る、株が下落でもすれば皆な青息吐息で、健全に經濟を發達せしめやうといふ觀念が、田舍の農民にさへも缺けて來たといふやうなことを耳にするのである。さうして青年の子弟は薄志弱行、學問は進まない、志は立たない、氣は弱くなる、放蕩は盛んにするといふやうな風で、望ある青年が次第に少なく成り、飛上り調子の者がありて、詰らぬ事に驅出して太鼓を叩くといふやうな譯で、どうも餘り感心せぬことが多いやうに聞いて居るのであります。不良少年などは激增して、感化院は各地に設立すれども、滿員で容れ切れない、監獄もその通りで、微罪不檢擧といつて少々の罪は赦しても、執行猶豫を與へても、尙ほ監獄は何處も滿員々々といふやうなことであります。さうして其處に新しい所の思想問題が起つて、妙な風に飛上つた考へを懷いて之を宣傳し、提灯を持つといふやうなことで、ゴタ〳〵ゴタ〳〵して居るのである。故に日本の現狀は洵に不健全なる狀態が多い、心ある者は慨嘆に堪へぬといふことは、今日否むことは出來ないと思ふのであります。

二、一切の病源

新樣に腐敗して居り、缺陷の多くなつて居る現狀は何より起るかと申せば、小さい原因を數ふればそれ〴〵別の原因のあ

る事でありますが、根本の原因に戻して考へると、この病氣の根原といふものは、一般の人心の墮落が本であらうと思ふ。人の心が低くなり、人の心が段々腐つて來たのである、その人心の墮落の中に、唯今擧げた人生觀が薄つぺらになり、乃至總ての社會現象が不健全に走るので、本に戻せば一つの人心の墮落に外ならぬと思ふ。

さうしてその人心の墮落は何より起るかといへば、その人心を導き、人心を教へる所の思想が混亂をして居るのである、その思想の混亂する所以は、その思想の本たる教化が輕んぜられて來たからである、さうしてその教化が勢力を失うて居る爲めに、教化の大本が明かにならぬからである。それ故に今日の不健全なる現象は人心の墮落に基き、人心の墮落は思想の不健全に基き、思想の不健全は教化を輕んずるに基き、教化を輕んずるは教化の大本を確立せざるに因りて、斯の如き弊害に陷りて居るといふことが言へる。もう一つ簡單に言へば、斯ういふ困つた事の出來て居るのは、人の心が腐つたのである、心の腐るのは教の本が立たないからである。それ故にこの病氣を癒すには教化を重んじ、教化の大本を確立せなければならぬ。その人心の墮落を喰ひ止めて、教化を盛んにしやうといふ考に戻つた時に、諸君は何を以てお互の心を導いて貰ふのであるか、一般國民の精神は何を根蔕にして打立てらるべきものであるかといふことに就て、確かりお考へを願はねばならぬのであります。

三、慢を去つて教に就け

今の惡い風は各人が非常に慢心をして、自分の考で何事でも判斷すれば宜いやうに思うて居るけれども、學ばざるの人、教を受けざる人は、到底尊いものでないのである。元と〳〵善き心を有つては居るけれども、これを磨き導かざるに於ては、即ち磨かざる粗石である、磨けば玉とはなるけれども、磨かんければ粗石である。粗石のやうな曇り果てたる心を以て物を判斷すれば、それは必ず過つことになる譯である。心を磨くといふには教に依つて磨かなければならぬ、自分が何にも考へずに居れば無論駄目ちやが、我ら考へても、「下手な考休むに似たり」といふことになつて、朝から晩まで手を組んで考へても、碌な考は出て來ない、それは孔子が、

終日思へども益なし、學ぶに如かず。

と言つて居る、朝から晩まで考へ込んで見た所が、出るものは欠伸ばかりで碌な考は出ない、やはり教を學び道を學んで、自分の心の從ふ所を定めなければならぬと言つて居る。その教を聞き、教を學び、教を信ずるといふことを取つてしまへば、人間の心には根蔕を失ふのである。『大學』の中にも、

綿蠻たる黃鳥は丘隅に止まる、人間は何處に止まるのであるか、それが分らなければ鳥にも劣るぢやないかと云つてある。所が今日の人はその心の居え所を忘れてしまつて居るのであるから、鶯が芥溜へ落ち込んでバタ〳〵して居るやうな譯で、さつぱり美い聲をして啼くことが出來ず、變な聲をするやうになつて居る、その變な聲が不平不滿となつて、「サボタージュ」と言つたり、「資本家横暴」と言つたり、變な事ばかり言つて互に罵り合ふことになつて來たのである。人が人たるの道を學んで居れば、その言ふ事や鶯の聲よりも尚ほ美しき聲を發すべき筈のものである。故に『本立つて道生ず』と言はれて、すべて人間の道が行はれるといふには、その根本を打立てなければならぬ、根本は教に基いて人の心を磨き上げるのである。さうしてこれは一夜造りの甘酒では駄目なんで、近頃のやうな新しいものを雜誌の端くれから學ばうとしても、四月の雜誌お三月の十五日から賣出されて、もう四月の月になつたら四月の雜誌は讀まぬといふやうなことで、只新しいものを爭つてやつたからといつても、到底尊とき教は出て來るものではないのである。近來の思想に於ての間違ひは、小さな事が變つて行くのが目先きに附いて、元からある大事のものが變らぬといふことを知らない、道德でいへば「體道」は萬世不易のものである、「用道」といふ用きは時と處と位置とに依りて變るものである、變る一方を知つて易らないものを忘れて居るといふ

ことは、餘程愚かなものである。人間の心も日々に働いて行く所を見れば變り變つて行くのである、けれども一方には變らぬ、生れてから死ぬまで――寧ろ生れぬ前より死んだ先まで續いて行く變らぬ心があつて、その心が生きて働いて或は花を見、或は月を見、或は歌を詠み、或は人と話をして行くのである。その變つて行く所だけをちよつと知つて、變らずに續いて居る心の本體を忘れた時には、昨日約束したことは今日は構はぬといふやうなことになつて來る、「君、昨日花見に行かうといつて約束したじやないか、さあ一緒に行かう」「それは昨日の心が約束したんだ、今日はもう花見は嫌になつた」といふやうなことになる、「昨日の心の事を俺が知るものか、昨日は昨日、今日は今日、刹那の心ぢや」なんといふて、ビョイ〳〵と現はれる心が皆な切れ〳〵ぢやといふので、刹那主義といふものが一時流行つた、「そんな續いて居る心なんといふものは無い、何でも刹那の心ぢや」といふやうな馬鹿な議論さへも、一時大分勢力を得て居つたのである、今でも左樣な考の人もあるであらう。

四、不易の體道

さういふやうな譯で、道德の事でもビョイ〳〵と變つて行く小さい事を以て、新しい思想とか、新しい觀念とか言つて、これを持囃すけれども、左樣にビョイ〳〵と變るやうなものは、元とこれビョイ〳〵といふやうなものだから、大して價値が無いのである、堂々たるものは左樣に變るものでない。恰もお日樣のやうに、千年二千年經つても別にお日樣は變らない、昨日のお日樣と今日のお日樣とは同じものぢや、けれども日々に新たなる光を放つてお居でになるのである。大切な人間の教へ、道、心得といふものが、左樣にビョイ〳〵變つて行くものではない、早く雜誌を讀まんければ時代に後れるとか、二日か三日新聞を讀まんければちよつと話が出來ぬといふやうな、そんな粗末な事をビョイ〳〵考へて居るから、ビョイ〳〵した人間が出來るのである、左樣な事が近來流行つて居るのは非常な間違ひである、教育勅語にもお示しになつて居る通りに、

斯ノ道ハ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ、子孫臣民ノ倶ニ遵守スベキ所、之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ

とある、我が大和民族の建國以來守つて來た斯の道は、國の開かれたる時より今日に迄び、又子孫萬世に及んで變らない道である。その變らない大切なるものを能く心得て置いて、それからビョイ〳〵と變るやうな所も少しは聞くが宜いけれども變らない大切のものを少とも心得ないで、變つて行く事のみを追ふらうとするのが、今日の弊である。聖賢の教に就てもやはり同じ事が言ふてあるので、

先王の道を行うて過つ者は未だ曾てこれ有らざるなり。

とあつて、やはり大切な王道――確かな人の道といふものは、變らず傳はりて居ると教へられて居る。佛教の教にも同じ意味があるので、三世の諸佛一貫の大道と言つて、如何に佛が變つても佛の教は變らない、前佛後佛その道を同じふすると佛教では申すのであります。佛樣と佛樣とに依つて意見が違つたり、教が違つたりする譯のものではない、完全なる佛の教は十方三世の諸佛皆な御同意であると佛教では說いて居る。それ故に釋迦牟尼佛の立てられた教が惡いから、今日直さんならぬといふものではない、どうぞ釋迦牟尼の教の眞髓を得て、釋尊の本懷に從つて行かねばならぬといふことで、進んで來て居るのである。

五、西洋文明の失脚

之に反して西洋の文明は移り變つて行き居るのみならず、今日は行詰つて居るのである、哲學上の事は後疑に陷つて行止つて居るし、經濟上の事は勞働問題に依つて行詰つて居るし、政治上の事も社會政策に就て行詰つて居るし、國際關係に就ても種々なる困難に遭遇して行詰つて居るし、道德上の事も自我發展などと言つたけれども、餘りに突張り合ひが激しくなつて困つて居るのである。デモクラシーも餘り効き過ぎて、是も困つた事になつて居る、今までやつた事が皆な鼻を突いて、

どの思想が健全だと取出して言ふことも出來ない有樣である。各國の狀態も歐洲戰亂の後を承けて獨逸の恢復、佛蘭西の恢復、英吉利の恢復、みな困難の狀況である、御承知の通り獨逸も亦新たなる混亂に陷つて、內閣も總辭職をし、國內の狀勢もどうなるか分らない。而して獨逸が償金を拂はんければ佛蘭西の疲弊も恢復が出來まい、英吉利も勞働問題が勃發して、五年の戰爭よりも尙ほ困るといふやうなことになつて來て居るのである。西洋の文明は皆な行詰つて居る、是は立て直ほさなければならぬといふので、改造々々といふことを言ふのであります、考へ直ほし、立て直ほし、燒直ほし、出直ほしといふやうに鼻を突いて居る、そこに改造といふ聲があるのである。

西洋の文明にも無論採るべき事もあり、長所もあらうけれども、大體に於て今まで善かつたと思つた事も行留つてしまつたのであるから、西洋の文明を入れて行くには一層注意をしなければいけない。惡い物は無論採るべからず、善いものと雖も——「ちとつと善いやうでもやつて見ると鼻を突く事が多いから」といふ風に警戒を加へて行かなければならぬ譯である。

六、東洋文明の眞價

然るにその西洋の偏りを受けて、東洋の文明の改造を叫ぶナンといふのは間違つた事である、前きに言ふ通り神たながらの敎も變らない道である、聖賢の敎も變らない道である、佛の敎も變らない道である。さうして是等の敎は何等今日に於て缺點も不足もないのである、あるやうに思うて居る人があるけれども、それは研究をしないからである、佛敎を罵る人にして佛敎を研究した人は無いと言はれて居る。支那の張商英といふ人が、學者であつたけれども佛敎の惡口ばかり言うて居つた、所がその奧さんが「あなたは佛敎の事を惡口を言はれるけれども、何時佛敎をお調べになつたか、」と尋ねた、「イヤ調べはせぬ、あんなものは嫌ひだから初めから見はせぬ」「佛敎を知らないで惡口を言はしやるのは宜くありますまい、能く調べて

言はしやるが宜い」と言はれて、張商英が佛敎を調べて一つ破佛論を書かうと決心をした、さうして段々調べて行つて「さア出來た」と言つて奧樣の前に出した本は『護法論』といふ本であつた、佛敎を破るどころではない、是は大切な敎だから佛法を護つて世に盛んにしなければならぬといふ事を書いた、『護法論』といふ書物は今でも遺つて居ります。日本の學者でも、佛敎に達した人で佛敎の惡口を言つた人は無い、今日でも帝國大學に於て佛敎を多少でも調べた人、假令ば井上哲次郎博士であるとか、姉崎正治博士であるとかいふ人に就てお聞きになれば、是等の人が佛敎を幾分かやつたのであるが、それは皆「佛敎は大切な敎である、東洋文明の權威として佛敎は保護しなければならぬ」と言うであらう、知らないで惡口言ふは間違ひであります。況んやパイ〳〵の手合が東洋文明の何たるかも知らずして、自分の祖先が血と涙とを以つて開いた文明を忘れて、さうして雜誌の端くれに書いてあるやうなことで、新しいと言つて騷ぐのは、頗る大人氣ない態度である、不健全なる態度である、飛上り者と言はれても一言あるまいと思ふのである。儒敎に就てもやはりその通りで、能く之を調べて見れば、今日拾つべからざる大切なる敎訓が尤ち滴ちて居るのである。神ながらの敎は國のあらん限り、大和民族のあらん限り、敎育勅語にある通り、上は至尊陛下より下國民全體に於て、之を拳々服膺して行かなければならぬ譯である、即ち

朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

と仰せられたのである。歐羅巴の戰爭があつたからといつて、この建國次來の大切なる道を、新しいといふ言葉で打捨てやうとするのは、不心得と言はなければならぬ。

七、安定せざる學說

それ故に西洋の思想の善惡を批判する前に、自分の事を能く知らなければならぬ、非常な立派な神ながらの敎があり、聖賢の敎があり、佛陀の敎がある。是等の敎は少なくとも世界文明の中に東洋文明として一方の大關橫綱である、西洋文明の

精神的の方面と取組をさしたならば、是等の東洋文明の中にある哲學の思想、道德の觀念、宗教の教義、その他東洋文明の特色といふものは、決して西洋文明に敗を取るものではなからうと思ふのであります。又日本人としては若しそこに足らざる所があり、缺點があるとしたならば、之を補成して進むといふ考へが無くてはならぬと思ふ、一も二もなく、調べもしないでそれを振捨てゝ、さうして他國の文明に憧憬れて、この偉大なる東洋文明を打捨てやうとするのは、實に考慮の足らぬ次第かと思ふのである。

そこで我國の民心を導き教へる所の本は、先づ我國に傳はれる三千年の精神的文明を認めて、その大切なる所を發揮して行けば宜いのである。一人二人の學者の議論などを今更聞いても、それはその時〳〵の考を書き立てゝ居るので、一年も經てば、「イヤ實はあゝ言うたけれどもあれはちよつと研究が足らなかつた」「あれは未だ能く調べなかつた」といふ樣な事を言つて、あとから〳〵取消〳〵〳〵又取消といふやうにやられて行く、その跡を追うて行つたのでは國民の思想は安定する時はない。ちよつと善いやうに見えても、國民一般がこれを受入れるといふに就ては、十分の試錬を經て、是ならばといふことにならなければ、國民一般の思想として奉戴する譯には行かぬ。そこで未だ〳〵日本に於ては從來の精神的文明を捨てゝ西洋に思想の指導を仰がんならぬ程に、決して東洋文明は衰へたるものではない。少なくとも日本は大和魂、國民精神までを質に置いて、西洋に頭を低げんならぬ程淺落しては居らぬといふことを、國民は自覺しなければなるまいと思ふ。故に諸君と共に、吾々の先祖が保持して來たこの東洋の文明を受繼いで、これを守り、これを子孫に傳へて行くといふことが、一番大切な仕事である。

八、惟神道の精要

そこで前に申した我國の神ながらの教、聖賢の教、佛陀の教、この三つの中にあるものを能く纏めて考へて行くことが大事ナンである。日本は實は上朝廷より下人民に至るまで、皆この三つの教を奉じて居るのである、佛教信者だからといつて神ながらの教を捨てゝ居るものではない、其所を能く考へなければならぬ、枝葉に道入るから色〻問題が數多くなるけれども、大切なる所はさう澤山あるものではない。神ながらの教といふのは、教育勅語にある「斯の道は皇祖皇宗の遺訓にして」といふ、天照大神樣より傳はつて來た日本の教を言ふのである。これを神道といふが爲めに宗教だと思ふけれども、それは違ふ、天理教とか蓮門教とかいふのは、最近に出來た所の、神ながらの教を笠に着て行く一種の宗教である、教育の勅語にある「子孫臣民と倶に遵守すべき所」と言はれたのは、あゝいふものではない、日本の神樣は宗教をお立てなさつたのではなくして、國をお開きになつたのである、國の事が大事である、天照大神はこの日本の國をお開きになり、神武天皇が愈〻日本の國をお纒めになつて以來、百二十二代の今日まで、皇室を中心にして大日本帝國を經營し、國家の力に依つて內は國民の安寧幸福を保全し、外は日本の力に依つて世界の文明に貢獻し、而して自ほ將來に多大なる天職を帶びて活動して居るので、この大日本帝國の國家的行動が神ながらの教の心髓となつて居るのである。拍手を打つて宗教の眞似事をして居るものではない、昔の神官は宗教家ではない、良い所は軍人であり、低い所は給仕みたやうなものである、白丁を着て居るのはあれは看護婦が白い上衣を着て居るも同じことで、神樣の前を掃除したり、御馳走を持つて行つたりするのである、上の方の良い所は軍人である、その間に宗教家といふ者は居りはせぬ、神主というと宗教家だと思ふから間違つて居る、田舍でもお祭の時分には昔の型が殘つて居つて、神主の良い所は馬に乘つて矛を前に立てゝ、軍人のやうな行列をするでせう、白い白丁を着て居る者は掃除番だの小使みたやうなもので、道具などを擔いで行くのである、あれは今の輜重輜卒の下に居る軍屬といふやうなものである、宗教家ではない、さういふ事も能く日本人は知つて居らねばならぬ。それを新らしく後に出來た天理教や、大本教を以て――それを信ずる信じないといふことは別の話だけれども、神ながらの教と混淆してはいかぬ。斯樣なものは俗神道、鈴振り神道と言うのである。日本人は如何なる宗教を奉じやうとも、如何なる道德に依らうとも、日本

人である以上は日本の國を大切にし、國家の爲めに御奉公をしなければならない、如何なる職業に居る者でも、その職業を通ほして國家に貢獻をしやう――軍人ばかりではない、億兆心を一にして世々厥の美を濟し、一旦緩急あれば義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼し奉るといふことを、國民一般、男女老幼の別なく、左樣に考へて行く所が神ながらの教の精神である。それは今日でも變るべきものではない、露羅巴の戰爭があつたからとか、向ふでデモクラシーと言ひ居るからとか、向ふで勞働問題が起つたからといつて、この教育勅語にお示しになつて居る大切なる點が少しでも變るべき筈のものではない。吉田松陰先生の言はれた通り、

世態變遷すとも大義存す

で、世の有樣は變つても國民の忠君愛國の觀念に於ては、一點でも動搖を受くべき筈のものではないのであります。尙ほ時ながらの教にはこれに伴うて報本反始の觀念といつて、本を忘れぬといふことが日本人である、新らしがるといふことは恰度日本の教の精神に反對して居る。報本反始――本に報じ始めに反るといふ考へ、古を尙ぶといふことが日本人である。西洋は新しい方へ遷り變つて革命などといつて、過去の文明を打壞して新たに改造するとか建設するとか言ふけれども、それは過去の文明が不完全なからである、今までの建物が粗末であつたから打壞して造りかへなければならぬのちや、名古屋の金城のやうな立派なものであつたならば、打壞して又造りかへやうといふものはない、何百年經つてもこれを保存し維持してこの美觀を傳へやうとするであらう。日本の文明は報本反始といふことが根本になつて居るから、國の方からいへば朝廷を思ふ心はその淵源に遡つて伊勢の大廟に對する敬神の觀念にまで積いて行き、その敬神の觀念がズツと皇室に對する忠愛の觀念に流れて行くことになる、又家に就ても親を大切にすると共に、祖父、曾祖父、先祖代々といふ所に遡つて行くのである。一般先祖を大切にする觀念が、親を大切にするよりも尙ほ重い事になつて居る、親父の墓を大きくして先祖の墓を小さくするといふ者は無い、そこが即ち日本の始めを忘れない精神である。能く人が出世をしても草鞋を脫いだ御恩は忘れないとか、或は最初自分が仕出した天神樣があれば、この天神樣を大切にするとか、その初めの出發點を何處までも忘れぬやうにして行く、故に自分は親より生じ、親は先祖より生じ、先祖も國の初めより代々の朝廷の御恩になつて居るといふ、重代相恩と申して、先祖代々の御恩といふことからして朝廷を思ふ心も强く現はれ、子々孫々がお世話になるも我が國家、我が朝廷であるといふので、忠君愛國の觀念が彌まさつて行くのである。唯だ新しきを尊んで舊いものを捨てるやうな考になつたならば、その間に非常な間違ひが起つて來ると思ふ。

神ながらの教に就ては色々ありますが、少なくともこの二つ位は知つて居らんければならない。日本人である以上は、皇祖皇宗の御められたこの國を護るといふことが何よりも大切であり、モウ一つは本を忘れぬやうにして行くことである。マルクスがどう言つたとか、クロポトキンがどう言つたとか、そんな事を以てこの建國以來の日本的大精神を動かすことは斷じて無いのである。

九、儒教の精要

モウ一つは即ち聖賢の教であります。この聖賢の教もいろ〳〵結構な事がありますけれども、就中大切な點は天道明德の教といつて、天道を敬ひ明德を明かにするといふことになつて居る。だから昔から一般にお天道樣といふ言葉があり、「さういふ事をしてはお天道樣に濟むまい」「人は見て居なくともお天道樣は見通しだ」「天道人を殺さず」といふやうな風に、お天道樣といふことを盛んに言つたのである。　明治天皇の五箇條の御誓文にも、

天地の公道に基くべし

といふ事があり、陸海軍人に賜はりたる勅諭にも、

天地の公道、人倫の常徑

とお示しになつて居る。この天道を敬ふといひ、仰いで天に恥ぢず、俯して地に恥ぢずといひ、人に依らずして天地の偉大なる所に向つて己が心を淨めて行かうとする精神、天道を敬うて明德を明かにする「赫赫上に在り明明下に在り」、「罪を天に獲れば禱る所なし」と言つたこの考が、聖賢の教の根本を爲して居るのである。それから導かれて人の誠が開かれる、誠の中より現はれるものは仁義忠孝の教となりて、實い所の親切の心と、その親切を行ふ所の順序次第を立てゝ、先づ君に忠義を盡し、親に孝行を盡すといふ忠孝の道德とが現はれる、この天道明德仁義忠孝の教といふものは、今日に於て決して廢れる筈のものではなからうと思ふのであります。

その意味を能く研究もし、人からも聞いて、神ながらの教は報本反始――本に反り始めを大切にする事、聖人の教は天道明德の意義を心得る事、この點をしつかり心に打込んで、それが己れの行ひを導き、事を判斷する標準になつて行かんければならぬ。それだけのものが打立つて居つたならば、詰らぬ事を聞いても決して動搖はしない、精神は弱らないのである。

一〇、佛教の精要

更に佛の教が我國に傳はりて、既に千四百年の永き間人心を支配して居る、今日衰へたりと雖も十七萬の僧侶は、やはり佛教信者の手に依つて生活をして居るといふものは、衰へたりといつても未だ〳〵侮るべからざるものである。若しも今日佛教が全滅されて、寺も無い、お經も讀めない、坊さんも無い、親父が死んでも葬式も法事も出來ぬといふことになつたならば、或る一種の不愉快を感ずるに違ひないのである。それ故に佛教といふものは今尙ほ日本人の心に大關係があるといふことは、否むべからざることである。その佛教は是れ亦非常な結構なものであつて、日本人は佛教を信じても宜し、信ぜずとも宜しといふやうな譯のものではない、必ず日本人は佛教の有難い事を知らんければならぬ、日本人にして佛教の有難い事を知らぬ者は、完全なる一人といふことは言へまいと思ふ。少なくとも東洋の哲學といふ、深い〳〵學問の方に就ては、佛教の價値は學に立派なものである。又前きにいふ人生觀といふものに就て、人はこの世に於てどういふもので、魂はどういふものだ、生れて來る前は人間はどういふ工合にして出て來たか、死んだらどうなるのちや、神樣とか佛樣とかいふものはどういふものちや、この天地宇宙といふものはどういふものちやといふやうな、大事な人間の考の根本を定むべき問題は悉く佛教の中にあるのである。神ながらの教も、聖人の教も尊いけれども、それに依つては能く魂の事や何かが分らないのである、それ故に佛教を除るといふと、人間の考が薄つぺらになつて來る、佛教を信じない人の考は、幾ら學問して居つても根本が定つて居ないから、それは洵に薄弱なものである。だから自分の女房が死ぬとか、可愛い〻子供でも死ねば、吃驚して眼を覺ますといふやうなことになる、是は考がお若いといふものちや、人生といふものはモウ少し徹底したる考を有つて居らなければならぬ、それには佛教を捨てゝは駄目であります。

又道德の事柄に就ても、聖人の教へ神ながらの教はあるけれども、道德の根據を突留めて、十分にその本を明かにして行くのは佛教である。又道德のあらゆる方面を整へる事――君に忠義、親に孝行の二つのみでは世の中は濟まぬ、人間お互に扶け合ふ社會的道德といふものが必要である。日本に於ては割合に社會的道德が缺けて居つて、「旅の恥は掻き捨て」であるとか、或は浮世三分五厘ちやとか、隨分下らない俚諺などがある、犬も歩けば棒に當るとか、フラリ〳〵と行けば宜いといふやうに考へて居る。どうしても佛教に依らなければ、社會的道德が十分明かにならない、又天地に對する道德も明かにならない。茲に神を認め佛を認めて行く宗教の信仰に進入つて行かなければならぬ。

尙ほその外に道德を實行して行く力は、佛教の信心を加へれば永く續いて行く。唯だ善い事をせよと言つても出來るものでない、澤山書物を讀んで居る人間よりも信心する婆さんの方が善い事を事實に能く行つて行き居るのであります。

又宗教としても佛教を除いては日本に大したものは無い、而して宗教は人間より除くべからざる大切なものであり、この煩さい世の中苦勞の世の中に精神上の平和が得られ、又困難を打破つて進んで行く眞の勇氣といふものも宗教の信仰に依つ

て得られる、世の中の利害相反して居るが如き事も之を融和して行く事が出來る、不仕合な事に出會うても慰める力となり、癲癇王が起つても引止める力となり、缺點多き人間が圓滿に導かれるといふことは、宗教の力に俟たなければならない。

一一、現社會の救濟

殊に今日のやうに社會が壞れて行く場合には、何を以て之を喰止めるかといへば、唯だ一通りの議論や學問では駄目ナンで、實際人の心に強き宗教の信仰を喚び起さなければならないのである、それ故に今は世界的にも宗教復活の運動が起つて居るのである。この墮落し行く人間の心を喰止める力は、一通りの道德の話では直らない、最も強い力のある宗教の信仰を與へ、朝に晩に信仰に依つて引締められて行く。宗教は不斷の刺戟鞭撻を得させしむるもので、佛壇の前に坐つた時ばかりでなく、自分が信仰を有つて居れば、道行く時も坐つて居る時も、始終自分を刺戟する、又佛壇の前に坐つた時にも、あゝ昨日は惡い事をしたといふ悔改める心が必ず湧いて來るのである。心配があつてもお勤行をしてお經でも讀んで居れば、その信仰の力に依つてそれが除かれる、宗教位効力の大なるものはない。一時宗教を不必要と思つた人もあつたけれども、最早今日は宗教を捨つれば世の中が壞れてしまひ、一人としては人格が潰れ、一家としては家庭の幸福はない、社會は破壞に終り、國家としても健全なる進歩はないといふことに依つて、新しい意味の自覺を起して、今日は宗教の復活運動に返らんとして居るのであります。左樣な場合に日本に於て如何なる宗教を採るべきかといへば、それは基督教も或る點には善い所もあらうけれども、國を異にし歴史を異にし事情を異にし、道德の觀念、風俗習慣を異にしたる所のものであるから、日本に於ては餘程注意を拂はんければならぬ。それ故に日本人が宗教を必要とすれば、佛教に依るのは無論の事であります。

一二、結論

耶の如く佛教の善い意味合――即ち宗教の正しき信仰を得、道德の根柢及實行力を得、哲學上の考の土臺を得るといふやうな大きな事柄が佛教に依つて充たされるのである。それ故に唯今申したやうな、神ながらの教に依つて國を大切にする事、始めを忘れぬやうにする事、聖人の教に基いて天道を敬つて明德を磨き、仁義忠孝の教を尊び、佛教に基いて唯今申したやうな三點を明かにして行くといふ事は、日本人である以上は誰でも心得て置かねばならぬ事である。佛教を信ずるから神ながらの教を忘れてしまつたり、只ナンマイダといふ事だけ知つて居るけれども、國家を思ふ觀念が無くなつたり、或は忠君愛國の考へさへあつたら佛教はそつち退けでも宜いといふやうな謬見が多いから、そこで今日のやうに西洋の思想が來た時分にグラ〳〵するのである。さうして精神の根據に動搖を來たし、墮落を始めて來たものであります。是等の教が駁然として立ち、さうして深く人心に徹底をして居たならば、前に申した人心の墮落といふ事が喰止められる、人心の墮落が喰ひ止められゝば、最初に申した人生觀が薄つぺらになつたり、乃至樣々な社會の不健全なる狀態は除かれるのである。それ故に今日の不健全なる狀態を恐れる人は、人心の墮落の本を突留めて、そこに教化の重んずべき事と、その教化の中心に立つ教を明かにして行かなければならぬ。それが立つて而して西洋の文明に於て採るべき所あれば採る、捨つべき所は捨てるといふ事になつて、決して遲くないのであります。どうぞその意味に於て諸君は一層この佛教の事を能く研究し、聖人の教の大事な所を聽取り、神ながらの教の意味も聽き取つて、さうして完き日本人となりて貰ひたいと思ふのであります。

これは決して難かしい事ではない、心を落つけて聞いたらば直ぐ分る、この大切なる教の事が四つや五つ覺えられぬといふ譯はない。國を大切にせんならぬ、始めを忘れてはいかぬ、天道を敬へ……そんなやうな事を覺えて行くのは何も難かしい事ではない。さうして覺えた以上は――初めは手帳にでも書いて置いて朝に晩にそれを見て、本當にその意味合を心に打込んで、それが自分の心を導き、事を判斷する標準となつて、一切萬端の出來事に於てそれを尺度として判斷して行くやうにならなければ、取留めもない心、その時の出來心でヒョイ〳〵やつて行くやうでは、大した偉い者にはなれまいと思ふのであります。どうぞ今申したやうな本を立てゝ一切萬事を捌いて行くやうに、諸君と共にこの美しき風が日本に盛んになることを希望する次第であります。

危險思想に對する警戒（三）

本多日生

六、國民の用意

然らば我國の狀態は如何といふ問題に入つて考へますと、これは我國の國民性といふものがあつて、こんなものは受付けないと先づ一般に言ふのであるが、それはその通りである。我國の國民性は、國家を呪ふやうな主義が來た時には、何人と雖もこれを撃滅すべく奮然起たねばならぬ筈のものである、容易に我が國民性は破らるべきものではない。けれども國民性は永遠に變らないものとは言へぬ、元と國民性と云ふものは教化より出來たものである。それは唯だ一通りの氣が優しいとか、或は忍耐力があるとかいふやうな、さういふ性格は或は地理、或は天然、氣候といふやうなものから來るけれども、少し高等なる意味を持つ思想、國家に對する理想、文明に對する理想、人生觀は如何といふやうな事柄は、天然の氣候や地理から來るものではない。その民心を指導したる教、教化といふものに依りて來るのである。故に教化の根本が變つた時に於ては、國民性といふものが變るのである、日本が佛教を採用して、佛教の旺盛なる王朝時代であつたならば、國民の思想は佛教的色彩を濃厚に帶びて來る、德川の中世以後佛教を排斥して儒教を本位にしてやれば、即ち儒教的色彩を國民が帶びて來る、又明治維新以來歐米崇拜の思想を以て國民を導けば、國民の思想も歐米崇拜的の國民性が勝つて來る。國民性々々といつても數百年間一貫するものではない、教化の方法に依りて變るのである。それがどの位の時間に依つて變るかといふことに就ては過激派が、言ふ所に依れば、極めて頑固なる國民性と雖も、十年を出ですして變つてしまふと彼は高言して居る、日本の樣な堅固なる國民性と雖も、疾すに十年の歲月を以てしたならば、スツパリ變つた國にして見せると言つて居る。成程さう言はれて見ると能く耳にするのであるが、まだ餘り年の行かない三十五歲か四十歲位の先生が言ひ居るのに、「私の書生時代と今日の書生とはまるで違ひます、話にならない位です、こちらは未だ若い積りであるのに彼等は吾々の事を舊い〳〵と言ひます、彼等の考へて居る事は一向吾々には分らぬやうになりました」と言つて居る、十年を一區劃としてまるで日本の國民の思想に大變化があるといふことは、誰しも言ふことである。自然に故郷して置いてさへも十年の歲月は今日國民性に大變化を來すのであるから、それが過激派の宣傳に基いて、又その提灯持ちがあつてやるとしたならば、國民性の變化は恐るべきものであらうと思ふ。さうして國民性が變つた時には、如何樣なる思想にもかぶれて行くものと謂はなければならぬ。尙ほ日本の狀態に於ては、過激思想に對しての所謂警戒といふものを十分に與へてない、先づ今では知らさずに置いたら宜らうといふ「臭い物蓋主義」でもつて來たのである。國民の間に左樣な思想が傳播して居つても、「イヤそんなものは無い」と言つて置く、役人の報告にも「そんなものは無い」といふことを以て名譽として居つたのである、「それはあるやうには謂ふけれども大したものぢやない」といふやうに言つて、之を唯揉消し主義にやつて居つた。さうして又過激主義は如何なるものを主張するかといふ事も、國民に知らさぬやうに今日までして來た、だから「ボルシエヴイズム」とか「社會主義」とかいふ言葉だけは聞いて居る、又「直接行動」とか「議會政策」といふ言葉ぐらいは少しは知つて居るけれども、やはり眞相といふものを知らない。現にその知らない證據は、

先年大逆事件が起つた時に、衆議院議員が擧つて當時の內務大臣平田東助氏に向つて質問して居る「何故に斯の如き思想が起りましたか、是は警察官が壓迫をするから起つたものである、小官吏の干涉が原因である」と衆議院では一般に言ふた。警察官が餘り威張り倒して、繩を張つて「一寸來い」と言つたりするから、それで斯ういふ主義が起つたのぢやといふ。此の如き質問が出て居るが、それは餘りに原因を知らなさ過ぎるのである。その外その當時に流行つた學者の話などを聞いても、實に抱腹に堪へぬ樣な事を言つて居るのであるが、今でも過激主義に對する國民の觀察は非常に不徹底であり、其の警戒が足らぬと思ふのであります。

又それから一般の民心が新奇を逐うて趨るといふ事も非常な强い有樣に現れて來て居る、新しがることが夢しいものである。それから唯物的傾向も中々强い、多くの官吏、多くの教育家、多くの商人、工業者——日本人を構成して居る所の大部分は唯物主義である。宗教家も唯物主義の人が多い、主義といふとをかしいけれども、唯お布施を目的にしてのみ生活して居る宗教家の多數は唯物主義と稱すべきである、唯商賣の道具に佛像を安置し、お經を讀むといふので、それは木魚を叩いてポク〳〵やつて居るのも、淨瑠璃語りが三味線を彈いてやつて居るのも同じものである、所謂佛像經卷を賣つて居る、唯物的である、それが非常に多い、各宗の坊さんなどでも本當に調べて御覽なさい、あの頭を叩いたならばみなユイブツ〳〵といふ音がする、恐ろしい有樣であります。

さうして民衆運動はどうであるかといへば、時々暴徒を揮ふに至つて居る。現に九州の八幡の製鐵所の如き、熔鑛爐を不用に屬せしむるといふやうな極端な事を企て、その時に田中熊吉といふ組長が、是は國家の一大事だといふので、其の熔鑛爐の熔けてドロ〳〵になつて居る鐵を流し出して、熔鑛爐が再び使へるやうにしやうとして働いた時に、大勢の職工はそれを袋叩きにして居る、實に酷い事をやつて居る。日本の勞働運動などといつて新聞が煽てるけれども、實に酷い事である、是は二月七日の東京朝日新聞に、八幡製鐵所の同盟罷業事件に就て書いて居る中に明かに載つて居る、

田中組長は急遽駈付けたる時、既に多數職工の退きたる後なりしかば、遙早く五個の熔鑛爐の湯口を打破り、熔解せる熔鑛約五十噸を流し出さしめ、熔鑛の冷却を防止し得たり、若し臨機の處置を施さざれば、鑛は鐵壁の如くに凝結して全く使用すべからざりしならん、罷業職工は田中氏の處置に憤慨し、同氏を打のめせと多數にて毆打し、人事不省に陷らしめて引取りたり。

この八幡の製鐵所は國家事業であるから、今度の運動なども資本と勞働の關係ではない、又賃銀の要求にしても、熔鑛爐を不用に歸せしむる必要はないので、組長がそれを助けやうとするのを袋叩きにするに至つては、所謂民衆の蠻風、民衆の暴動化である。今日八幡に起つて居る狀態も全く暴動化であるから、警察官なり軍隊なりを出動せしめなければ納まらぬといふ程度である、「そんなものを出さなくても宜い」といふのは、それは無責任な者が言ふので、出さなければ如何なる暴行をやるか分らぬ、建物を破壞し、放火し、人を傷ける といふことをやるのである、それは暴動である。人を叩き殺し、火を放けてもそれがストライキであると言うことが出來るならば宜いけれども、ストライキといふものは「同盟罷業」ナンであるから、業務を休むといふことであつて、家屋を打ち壞すといふことはストライキではない、即ち民家の暴動である。又八幡のみならず各所に於て、左樣にして澤山なる暴動が促されつゝあるのである。普通選擧運動にしても、二月二十三日芝公園の大隈侯の銅像の前に酒樽を拔いて騷ぎ、さうして政友會の本部に押寄せ、總理大臣の官邸を襲うた狀態、七十三名の檢擧、これ暴動にあらずして何ぞ。

又人道主義の甘い言葉に醉はされて居る人があるか無いかといへば、多くの學者はこの言葉に醉ひつゝある。又基督教の宗教運動なども、甘い言葉をもつて、ボルシエヴイズムの運動と同じ程度に於て國家觀念を弱らせつゝある、間接のボルシエヴイズムの運動である。彼等は決して國家を通して人道に貢獻せよとは言はぬ、國家主義を否認して居る、萬國主義とか、人道主義とか、世界主義とか、博愛主義とかいふ言葉を以て國家主義に對立せしめて、彼はその主義を宣傳するに至りては、ボルシエヴイズムの間接宣傳である。

それからデモクラシー運動がどういふ程度に進みつゝあるかといへば、是れ亦勞働運動を誘致し、普通選擧運動を誘致し、さうして國權を弱める運動に向ひ、それから富の階級制

度を打破する運動に向つて居るといふことは、是れ亦爭ふべからざることである。言拔けをすれば如何樣にも言拔けは陽來るけれども、斯の如き問題は言葉で言拔けが出來て宜いといふものではない。その眞相を看破るとき、どうしても惡化して居ると私は考へる。

さうして今や日本に向つて、蛇の頭と尻尾を合せる爲めの目標として、過激派の宣傳が非常な强い力で押寄せて來るといふことに對しての國民の自覺が無い。國家の鬪ひは先づ思想の上に於て起るので、武力の戰ひは第三に起る、第一思想の鬪ひ、第二經濟の鬪ひ、第三武力の鬪ひとして今後は國家が興廢存亡して行くのである。然るに第一の思想の鬪ひが既に開かれて居る今日であるのに、「鬪ひ開かれたり」といふ自覺が無い、デモクラヘモクラ言ふ者ばかりになつて、殆ど武力の戰鬪にこれを比したならば、露探獵探ばかりといふやうな有樣になつて、ワイ〳〵言うて居るのである。實に思想界の鬪ひに於ての態度の不鮮明といふか、不自覺といふものは激しいことである。

又國民が彼等の勢力に對する觀察も誤つて居る。「過激派ナンといふものは其樣に恐るべきものでない、そんな事を言つて勞働運動を妨げるんだ」等と多くの人は言ふけれども、決してさうでない。勞働運動も過激主義の中に捲込まれ、政治運動も捲込まれ、總ての世界の出來事は殆ど過激主義の中に捲込まれざるものは無い。歐羅巴の大戰爭の全部さへも、これを利用したるものは過激派のみで、後はまごついて居るのである、誰もこれが爲めに益する者は無い、英吉利が益を得たにもあらず、獨逸が得たにもあらず、唯益を得たる者は過激派のみである、それ程彼等は偉大なものである。然るにも拘らず過激派の勢力を侮り、過激派に憧ふる決心が無いといふに至つては、これ實に敵を侮るといふものにして敗れを致すの原因である。私は過激派くらゐ恐るべきものは無いと思ひます、他のものは恐るゝに足らぬ、唯世界に恐ろしいものはこの過激派である。さうしてその源が猶太教と基督教の鬪ひであつて、その怨靈が祟つて此に來たものだと思ふ時は、これに引導を渡してこれを成佛せしむるものは、法華經に依つて日蓮主義が引導を渡すより外に手の着けやうはないものであるまいかと思ふのである。更に角度ふの基督教と猶太教とのもつれが斯樣な有樣になつて、東洋の釋迦の教い、法華經に依つて引導を渡さるべくこの東洋に迷ひ込んで來たのではないかと思ふ。故にどうしても日本人は大覺悟を以てこの惡思想を全滅すべき運動に就かなければならぬ、國力を擧げて鬪ふが宜しい、是が眞の人道に貢獻する所以である。決して日本一國の爲め計りではない、世界人類の爲めに、斯の如き狂暴なる被害の傳播を防ぐといふ活動に起つのは、眞に英雄の事業であり、日本の天職であると私は信ずるのであります。

七、日蓮主義の法幢

そこでこれを日蓮主義の立場に比較すればどうかといふと、日蓮主義は御承知の通り危險思想に對して起つた主義であります。少し內容は違ふやうであるけれども、人道主義の標榜に依つて危險思想が蔓るとするならば丁度日蓮聖人の當時は、佛教のなま溫い坊さんの頭顱が慈悲といふことに依つて國家を忘れて居つた、日蓮聖人が、

先づ國家を祈つて須く佛法を立つべし

と叫んだことは、今日にすれば『先づ國家を祈りて須く人道を立つべし』であつて、當時の佛教の慈悲主義が國家を祈ひしたといつて慨歎したのである。又

我日本の柱とならん

と絕叫されたのも、多くの坊さんが一切衆生の導師であるとか、平等主義、博愛主義に流れて居るから、そこで日蓮聖人が「日本の柱」といふ國家中心思想を標榜したのであつて、これは色々のボルシエヴイズムの思想に對して起つたものである、日蓮主義は形は變つてもボルシエヴイズムに對して起つた所の健全なる國家主義である、それから思想の恐るべき事を以て日蓮主義は立つたので、それは國家を經營するには武力も經濟も色々要るけれども、先づ思想である、『法は體なり、國は影なり』、先づ國家を健全に發達せしむるには、正法を立てゝ國民の思想を教化することを第一に置けよと叫んだことが、丁度今日の思想を匡救する唯一の議論である、これは何ものにも替へられぬ立派な主義である。

それから、唯物化を防ぐ等といふ事は、是はモウ日蓮主義に缺ける所ではない、最も强く日蓮聖人は不惜身命を唱へて、法は重し、身は輕し。

と言はれて居る。所が今日は「身は重し法は輕し、パンに依つて生きん哉」といふのであるから、丁度日蓮主義と正反對のものであるといふことが分る。

それから個人の自由に醉つて國家の機能を忘れるといふことも、日蓮聖人は否定するので、

一身の安堵を思はゞ先づ四表の靜謐を願るべきもの也。

と言つて、個人の安寧と雖も國家の靜謐の下に在るのだといふことを說き、國家主義を標榜して、個人の自由などといふことは第二に置けよと敎へられた。

それから賢哲主義のことに就ては、日蓮聖人は最も賢哲主義を標榜するもので大勢の者に讚められたからといつても、愚者にほめらるゝは第一の恥なり。

と言ひ、多くの者が集つて反對しても、一人の賢者に敵ふものでないといつて、星が幾つ集つても太陽一つに及ばぬぢやないかといふので、即ち「一輪主義」――一つの太陽を奉ずる所の主義、「一乘主義」を執つたものである、さうして諸乘は一佛乘に歸するものであると叫んだ。其の點は今の衆愚を味方にして暴動政治をやるやうな態度とは違ふから、日蓮聖人は三類の敵人を引受けて、即ち法王の家人は一人である、敵は多勢であるけれども、此處に押寄せ、彼處に攻め寄せて、彼等を悉く降服せしむるといふことを誓つた。眞に一人して天下を春負つて立つといふ、この自ら任ずるの精神に生きるもので、「一人は一人ぢや」とか、徒にパンを要求するといふやうな乞食の集團みたやうな事は日蓮聖人は許さぬ。今日の議論は恰も乞食が大勢集つて、パンを分けて下さい、飯を分けて下さいといつて椀を出したやうな議論である、自ら春負つて立つといふこの大決心が即ち日蓮主義である。

それから理義を尊んで決して暴動などに據らない。智者に我が義を破られたならば從ふけれども、暴力を以て來るならば、日蓮を頭の座に据えやうが、樣々の災難に遇つて迫害せられやうが、暴力には決して屈しない。假令首斬られやうとも、流し者に遇はうとも、息の通はん際は自分の正義の主張は枉げない、即ち剛をば稜鋒を以て突き、鋼を以て頭を切ることあらんとも、正義の主張は一歩も後に讓らないと言はれたこの勇氣、これは今日の日本人が唯暴動などを重んじて、「多數だから仕方がない、長い物には捲かれろ」だナンといふやうな弱いものではない、そんな事ではならぬ、今の普通選擧運動であらうが、多くの政治問題であらうが、皆醉うて居る、駄目ぢや。ワイ〳〵考へる無い者を多勢寄せて、多數の頭ごなしで事を決しやうといふやうな態度は、今日のやうに世界の思想が動搖して居る時には殊に禁物ぢや。ボルシエヴイズムの勃興せんとする時には、この愚なる多數の群衆を煽動してその暴力に依るといふやうな運動が一番禁物である、何が恐ろしいといつて此の位恐るべきものはない。勞働運動に意義があらうが、政治運動に意義があらうが、民衆を暴動に導く運動は、國家を過る第一の罪惡である。今頃デモクラシーを奬勵したり、今頃政治運動に酒樽などを拔いて踊ね廻らんとする者は、眞に國家を思はぬ者である、それでも國家を思うて居るといへば馬鹿者である、そんなものは駄目ぢや。國民は戀々として水盃でもして掛らなければならぬ秋である、そんな跳ねたり飛んだりするどころではない、靜かに考へて息を凝らして、この國家の隆運の爲めに貢獻せんならぬ秋である。

誠に今日のやり方は經濟運動でも、政治運動でも、デモクラシー運動でも總て皆浮いて居る。これは日蓮主義から大鉈槌を下してやるべきものである。當年日蓮聖人が四箇格言を叫んで、彼等を國賊なり、墮獄の者なりと言はれたが如く、今日の多くの飛上り運動は悉く國賊である、墮獄の者であるといふ宣告を與へて彼等を膺懲するのが、日蓮主義の立場であると私は信じて居る。どうしても本氣でやらなければならぬ、遠慮すべき時ではない。彼等の運動といふものは皆蹉跎として左樣な事をやつて居るのである。

どうか日蓮主義者は自ら任じて益々この方面の研究を積み決心を固めて、立正安國の祖訓を奉じ、日本乃至一閻浮提の人道の敵である所のボルシエヴイズムなるものを撲滅したる偉勳を、永く人類の歷史に貼すべく、日本の國家と共に日蓮主義が立つてやらなければならぬと思ふのであります。是が今日に於ける最も意義ある所の運動である。人類を惱まし、人類を塗炭の苦みに導くボルシエヴイズムを撲滅すべく、日蓮主義が先頭に立つて日本人を率ゐて、世界人類の爲めにこの大業を完成するといふことに進んで行きたいと考へるのであります。甚だ長い時間を煩して恐縮でありますが、是で私の講演は終ります。

（完）

國民の覺悟

陸軍大將　大迫尙道

それで今日の總ての弊害はこの心の根底を失づて居る、心の腐敗といふことに歸着するとしましたならは、吾々は今日の世の中を救ふに就ては、先づ心を正しうするといふことが第一に着手すべきことであると私は思ひます。お釋迦樣は斯樣な事を言つて居る、人間といふものは各々佛になる所の種を持つて居る、性分を持つて居るものである、人から貰ひ物でない、借り物でない、自分が生れながらにして具へて居るものであるといふ、これは確かであります。皆さん能く心に留めて考へて御覽なさい、人の居らぬ所で惡い事をしませうか、人は知りませぬけれども、自分の心は確かに知つて居る、自分の動作は陰であれ陽であれ、皆な自分の心はこれを承知して居る、して見るとこの心といふものは即ち佛の種であると思ふ。さうしたならは吾々の言語動作といふものは、この心の神樣に伺つて見て、さうして正しいか正しからざるかといふことを伺つて、その上で正しいことであつたならば之れを實行し、正しからざる事であつたならば斷じて之れを止めるといふ勇氣を、繰返し〳〵即ち克己心を以て强制して行くことに於て、初めて修養が積み、努めずして自から立派な動作を爲すやうな境遇に達するものであらうと考へます。

是れが即ち成佛した所の境遇であらうと思ふのでありますが、人間は斯樣な境遇に皆な達しなければならぬものだと思ひます。さうしますと玆に我慾の精神がなく、人に向つて始終爽かな心を以て、何處に向つてでも嘘は吐けないのでありますす、孔子は斯樣な事を言つて居る、

内に省みて疚しからざれば、夫れ何をか憂へん、何をか懼れん。

自分の心に尋ねて見て疚しい事がなかつたならば、世の中に憂へることもない、又懼れる事もない、これが本當の自由であると思ふ、本當の自由といふのは斯樣な境遇に達したのを謂ふのであらうと思ふ、さうして自主といふことも玆に在ると思ふのであります。

今日人が唱へて居る自由は決して斯樣な自由でない、我慾に基いた自由を唱へて居るのであるから、斯樣な自由を銘々が言ひ張つた日には、確に世の中は不自由になる、皆が自由勝手な事をやつて御覽なさい、確に世の中は不自由になつて、今日の如き行詰りが出來るのであります。それから孟子は斯樣な事を言うて居ります、

身に省みて直くんば千萬人と雖も我れ行かん。

自分の心に尋ねて見て正しい事であつたならば、千萬人の敵があつても、自分は突き拔けて行くといふ勇氣が出る者である。即ち吾々はこの正義に基いて、我慾を捨て〳〵正しき道に向つて行くことに於て本當の勇氣が出て來、さうして人間としての價を發揮することが出來るものであると思ふのであります。

今述べた事は各自の修養法に就て皆樣に御相談をしたのでありますが、吾々各自が斯樣な精神を以て自ら身を修めると同時に、社會の制裁を以て、社會の風教を以て又お互に立派な精神を造り上げて、心を正しくして行かなければならぬであらうと思ひます。例へば假に私が泥棒をするとか、嘘を吐くとか、又は博打を打つとか、惡德を有つて居るとしませうか、この惡德が私一人に止まれば左程世の中に害は爲しませぬ、けれどもこの惡德といふものは忽ち人々に傳染するのであります、恰も虎列刺病が人に傳染すると同樣、心の病氣も忽ち人に傳染するのであります。斯う考へて見ますと自分勝手な動作は出來ぬ、自分自ら自分の行ひ、言語動作といふものを正して行かなければならぬ。又斯樣な人がお互ひの社會の中にありとしましたならば、その心の病氣を己れに自から感染するのみならず、自分の子供や兄弟にもその毒が感染する、さう考へて見たら默つて居られぬのであります。前に述べます如く各〻自分の子供も立派な人間であり、成佛する性質を有つて居りながら、斯樣な一二人の爲めに惡感化を受けて、共にその不幸を蒙むるといふやうなことがあつて

は、お互ひの力を以て之れを制裁して行かなければならぬと思ふ。それが即ちお互ひが今日の世の中に於て交際する間に於て、風教を正すといふことになるのであります。さうしてその社會の風教の力に依つて、惡い所の思想又は動作を矯正して行かなければならぬ。

先刻からお話の通りに、今日は隨分惡い思想が蔓つて居りますが、併し日本全般から言うたら是れはホンの一部分であらうと思ふ。或る一部の野心家が色々な事を言うてこの世の中を騷がせ、或は日本國を破壞しやうと掛つて居るのであります、斯樣な者の爲めに吾々全般が共に亡國の不幸を蒙むらなければならぬかといふことを考へて見たならば、實に馬鹿らしい話である、是は決して獨つて居られぬのであります。日本の全般の人口から考へて見たならば、惡い思想を有つて居る人は確に一部分である、それが邪魔をするのである、その邪魔をする人間に吾々が雷同してやるやうな事があつては、實に馬鹿らしい事である、人間の自主獨立といふことはそこに在ると思ふ。自分の心を土臺にして、猥りに人の說に雷同することなく、その是非善惡を能く判斷してやらなければならぬ。一昨年の米騷動の如きは私はさう思ふ、これを煽動する人があつてさうして雷同する者が多かつたが爲めに、あゝいふやうな暴動が起つたのである。是れは多くは新聞紙に責任があると思ひます、僅か富山に於ける女房達の騷動から、これを新聞紙に掲げて騷ぎ立てたから、何處でも彼處でもこの運動が流行して、日本全國に及んだのであります。成程新聞の煽動もありませうが、併しこの煽動に感ずる所の人といふ者が、確乎たる人間一人前の價がないのである、人間一人前の價があるならば、事の善惡といふことを考へて動作をしなければならぬ、人の煽動に依つて自分の心が彼れ此れ動かされて、さうしてワイ〳〵騷ぐやうなことであつたならば、一人前の人間とは言はれない、洵に恥かしい話である。譬へて見れば吾々は日本丸といふ大きな船に乘つて太洋に乘出して、暴風雨に遭つて居る最中に、この船中に於て若し喧嘩を始める者があつたならば、それが爲めに吾々は共々にこの船と沈まなければならぬのである。此の事を吾々は心に留めて、社會の力を以てこの惡思想の者を撲滅しなければならぬであらうと思ふのであります。即ち今日の急務は各自が自覺して、さうして心を土臺として己れの修養を積み、心を正しうすると同時に社會の制裁力を以てこの惡思想を撲滅し、健全なる所の思想を發達せんければならぬであらうと切に望む次第であります。

それで少し話が長くなりますけれども、暫く御靜聽を願ひたいことは、吾々が此處で自覺しませぬといふと、到底我等白人種には及ぶことの出來ぬといふことの例として、獨逸の戰爭前に於ける國民性が如何なるものであつたかといふことを、御參考に申上げたいと思ひます。今日はどうなつて居るか分りませぬが、私が明治二十二年から二十六年まで獨逸に居つて研究した事、又聞いた事をお話するのでありますが、當時の獨逸人の性質といふものは多々學ぶべき事があるのであります。第一誠に簡儉である、例へばマツチは使つてもその軸木は決して捨てない、皆之を取つて置いて、さうして箱と共に溜ると之を慈善園に寄附する、慈善園はその古いマツチ箱をマツチ製造所に持つて行つて安く買つて貰ふ、その金で以て慈善園の事業に使ふのであります、その古マツチは製造所で再び藥を附け、又箱に藥を塗り替へると新しくなりますから、獨逸のマツチといふものは安くなる、それ故に獨逸の國民は自分がマツチを捨てないで取つて置くといふ面倒を見たその報ひとして、安いマツチを使ふといふ幸福を得て居る、それから之を外國に持つて行くと、外國の品より確に獨逸の品は安いから、獨逸のマツチで外國の市場を占領してしまふ、隨つてドン〳〵輸出が殖えて、稅關の上り高といふものが澤山になつて來る。獨逸國民は斯樣な儉約をした報として、自分の懷中から金を出すことなくして、軍艦を造り或は大砲を造り、鐵道を敷くといふやうな、必要な所にこの金が廻つて行くのであります。それから日本の醫學生が獨逸の大學に行つて藥を研究しますのに、試驗紙といふ紙があります、桃色をした巾五分、長さ一寸か一寸五分位の紙であります、一錢も出したら十枚も二十枚も買へるやうな安いものであります、その紙を日本の學生は一つの藥品に就て一枚づつ使つて捨て居つた、所が獨逸の教授がそれを見て、「日本ではそんな贅澤な事をするか、この一枚も國家の資である、斯樣に無駄に使ふものではない、一枚あれば十遍も使へる」と言つてやつて見せる、それはちよつと端を藥に漬して、色が變

れば試驗の目的は達するのであるから、それだけ千切つて又次の葉に漬けるといふ樣にすると成程十遍も使へる、併しその當時は日本の學生は、誠にケチな事を言うと考へて居つたが、獨逸の學生がやるのを見て居ると皆さうである、そこで初めて感服して、成程獨逸の今日の富强を成したのは、國民が皆な斯樣な國家觀念を以て、廢たるべき物をば節儉するから斯樣な大きな國家を成したのであるといつて、感心したといふ話でありますが、「この一枚も國家の寶である」といふ教授の言葉、私は洵に感服するのであります。斯樣な觀念の下に節儉するならば、ケチどころではない、實に崇高なる所の精神であります。それから煙草の吹殼或は葉卷煙草の切口、これも決して捨てない、皆取つて置いて之を賣つて、その金を以て十二月二十五日即ちクリスマスの時に、子供に日本で申すお歲暮をやるやうに品物を買つて呉れるのであります、さういふ風に子供の時から無駄に捨てるものでないといふことを實際に教へて居る。今度の戰爭では、家庭で銘々が食つた果物の種子を學校の生徒に持つて來させて、之を學校で集めて中央に送り、その種子から脂を搾つて脂肪の缺乏を補充したといふ事でありますが、これも將來必ず行ふでありませう。斯樣な心持を以て國の富を增す所の人間を相手として、吾々は將來經濟上の戰爭をして行かなければならぬのであります、日本も斯樣な精神を以てやらなければ、到底彼等と競爭することは出來ぬであらうと思ひます。

所でこれは一人や二人でやつたつて何にもなりませぬ、日本では一人が唱へても決して是が一般に行はれるといふことは難かしいのでありますが、獨逸では一人が「善い事だから之をやらう」と言うと、忽ち行はれるといふ所に私は感服するのであります。それは國民が訓練されて居らなければ斯樣な事は到底出來ぬのでありますが、この訓練を作るに獨逸は軍隊の教育を以て造つたものである、軍隊では御承知の如く規律がやかましい、命令は能く遵奉しなければならぬといふ習慣が出來て居ります、さうして國民が殆ど軍隊教育を經た國民でありますから、一度善いといふことが分ると皆な行ふ譯であります。

それから彼等は正直であります、田舍に行つて見ると街道の並木が、日本では杉とか松とかいふものでありますが、獨逸の並木は果物であります、梨、林檎、桃などが綺麗に生つて居ります、併しそれを通行人が一人も取つて食ふ者は無いそれ故にその實つた果物を賣つた金を以て、その道路の修繕費に充てる。是も各自が正直であるといふと、斯樣に自分の懷中から金を出すことなくして、立派な道路を使用するといふ幸福を國民が得ることになるのでありまして、佛教で謂ふ所の善を積んで置けば善が返つて來るといふことになるのであります。是は小さな事でありますが、私の實驗談として獨逸人の正直な事の一例をお話しますが、私が田舍の家庭に招かれて行つて、其家の兄弟と田舍の公園に散歩に行つたことがあります、さうすると田舍の公園でありますから殆ど人は居らない、巡査は固より居らない、道路外の芝生の中に野生の菫の花が咲いて居りましたから、私は何の考もなくその芝生の中に道入つてその菫の花を取らうとしました、所がその兄弟が私に向つて、そこは道入る所ぢやないといつて忠告して呉れたのであります、私は洵に恥ぢましたが、それと共に實に感服した、獨逸人は斯樣な小さな事にまで規則は守るものであるかと感じました。日本の公園へ行つて見ると「此の木折るべからず」「此の芝生へ道入るべからず」といふやうな禁制札が深山立つて居りますが、獨逸には決してさういふものはない。それは國民が皆な自分の守るべき規則は守るといふ精神がそこに至つて居るので、禁制札のある所は人民の道德が進んで居らぬといふことを表白する標本であると思ふのであります。

それから是は獨逸ではありませぬが、由比大將の事實談であります、由比大將が英吉利の家庭に下宿をして居つて、夕食の時に子供に蜜柑をやらうとした、さうして子供が手を出した時にそれをチョッと引込ませた、能く日本ではやることであります、所が其家の主人が眞面目に怒つて「子供に嘘を吐くことを教へて呉れるナ」と言つたといふことであります、斯樣な教育法であります。日本では子供だましといつて、ちよつと瞞すことは何とも考へて居りませぬが、是は道德を進める上に大關係を持つことであると思ひます。

それから獨逸人は洵に組織的である、能く物事を計畫して組織を立てゝやるのであります、例へば道路に沿うて番地を附けるのに、右側の方を一、二、三、四と順々に行きます、

さうして向ふへ行詰ると今度は左側を二十四、二十五、二十六といふやうに逆に戻つて來る、斯うなつて居る、それで道路の四ツ辻に行くと大體自分の尋ねる番地は分る、例へば五番地を尋ねるのに、その四ツ辻の番地が十番地なら右に行けば宜しい、十五番地なら左に行けば宜しいといふやうに、大體判斷が附くから直ぐ探すことが出來ます、是が日本のは淘に複雜、不規則である、その爲めに日本人が費す所の時間といふものは大變なものであつて、一人や二人の時間は左程關係は持ちませぬけれども、國家の上から言ふと大きな損失になつて來るのであります。

それから消防署の設備なども、伯林市中の或る處に火事があるといふと、其處に十五分以内に達し得る距離に消防署が置いてあります、さうして消防署に行つて見ると下にはポンプに馬が附いて居る、さうして二階に消防夫は居りますが、天床に圓い孔が明いて居つて、圓い柱が立つて居る、それは消防夫が階段を一人々々降りて居つては時間が掛るから、その柱に抱きついて滑り落ちるのである、その位時間の迅速といふことを考へて計畫をして居るのであります。さうして四ツ街道毎に警報機がありまして、恰も日本の郵便箱みたやうなものでありますが、そこに行つて引手を引くと、電信裝置で直ぐ消防署の方に第何號の警報機の附近に火事があるといふことが分りますから、急ぢポンプを引出して、十五分にして駈つけるのであります、それ故に嘘のやうでありますけれども、階下が燒けても二階では驚がない、二階が燒けても階下では平氣で居るのであります。これは建築する時の設備にも依りますが、彼地では建築をしますには警察の檢査を三度ほど受けます、先づ竈の構造に一定の制限がある、それから天床と二階の床の間に鐵の網を張ります、さうすると焰が鐵の網に當つて四方に熱を取られてしまふから、上に燒け拔けない、故に二階に燃えうつるといふ憂が少いのであります。斯樣な有樣でありますから自然に先祖代々の寶物といふものが、今日の世の中に遺つて行くのであります。

獨逸の善い所を申せば未だ澤山ございますが、餘り長くなりますからこの位にして置きます。斯樣なお話をすると皆樣の頭には或は不快を感ぜられた方があるかも知れませぬけれども、吾々は此際自から反省して、公平なる心を以て彼等の長所を採り、さうして我が疑は捨てゝ行かなければならぬであらうと思ひます。斯くして歐羅巴人に比較して、何れの點から見ても日本人は西洋人に劣る所はない、人格の上から言ふても正直であり、眞面目に働く、又戰爭をさしても實に强いといふやうな位地に達してこそ、初めて彼等と對等の交際が出來るだらうと思ひます。若し今の儘で不眞面目に、發猶な事をやつて商賣をするが如き有樣でありましたならば、國は如何に强くなつても、彼等は心中には我を輕蔑するに相違ない、輕蔑されると到底對等の交際は出來ぬのであります。

斯く考へて見ますと最初に申した如く、實に今日は我國が亡びるか益々隆んになるかといふ境目に在るのであります、さうして努力しなければならぬ事が澤山ありますから、皆樣と共にどうか一つ眞面目になつてこの日本を救ひたいものであるといふのが、今日私が皆樣に御相談を致す次第であります。私の申した所に惡い事があつたならば、先刻申した如くどうか十分攻擊をして歎きたい、是で私の申上げる事は終ります、長い間御靜聽下さいまして有難うございました。

（完）

二、山田誠心師

名古屋の產で、今は千葉縣の押日來光寺に居る。日蓮主義の活動の一面を擔化したとも稱すべき青年僧で、馬に騎る、自轉車を飛ばす、長途でも惡路でも平氣で歩く。演壇にも立つし、奔走もするし、經營もやる。頗ぶる世話好で他家に因向に行くと、法衣をかなぐり捨てゝ終日來つきの手傳をして居ることがあるし、道を歩いて居ると、突然田の中へ飛び込んで、泥濘脛を沒する中で、炎天に田の草取りの手傳をやる、そして頗る呑氣で奮鬪を續ける、慥かに日蓮主義畸人傳中の一人である。

三、桑山惠順

天台宗の巨刹に住職して居つたが、無屢の如くに振り捨てゝ、穆淺山内先生の麾下に參じ、今は熱烈なる日蓮主義者である。用事を頼むとやつてくれない、默つて居ると何でも働く、喜ぶであらうと親切に盡してやると知らん顔をして居るし、心配するであらうと思はるゝ大事が降つて來ても晒々として居る。人若し本多親子に禮を失する樣の事でもあらうならば、坊主頭にねぢ鉢巻でもしかねまじき見幕を示すし、又日蓮主義の會合があれば雨が降つても風が吹いてもきつと出かけて行つて、そして默つて聽衆の間に交つて其の批評を偵察して居る。頗ぶる犬が嫌いで、穆淺先生の愛する狗犬の爲に日角沫を飛ばす事が、一ケ月中に約四五回はある、餘程珍らしい一大變物と稱すべきであらう。

佛教信仰の正統

本多日生

第九　三寶に依るの信仰

佛教の信仰は樣々に分裂を致して居ります、宗派も分れて居りますけれども、苟くも佛教の信仰であると許すには、三寶に歸依し奉るといふことが前提であります。若しも三寶に歸依しない、又はその中の一つ二つには歸依しても、三寶を整へて歸依しないと云ふ人は、佛教の正しき信者でないといふことは議論の餘地は無いことであります。併し事實に於ての佛教信者、又惜侶は、三寶に依ると云ふ意味を整へてがゝらうといふ觀念を失つて居る者が多いのであります。日蓮主義者の中にすらも三寶の觀念が混亂をして、お祖師樣が有難いと言へばそれぎり佛を忘れ法を忘れて居るやうな人が少なからず存して居る次第である、斯樣なことは全く佛教信仰の俗化した所謂迷信俗信と稱せらるべきもので、猪にも棒にもかゝらん手合ひのやることであります。佛教信仰の常識を有つて居る者は、必ず三寶を整へて信仰を捧げるものであります。涅槃經といふ大事な御經、これは殆んど法華經に次で大切な御經であつて、日蓮主義者は涅槃經を以て法華經の解釋であると稱して居るのでありますが、その釋尊入滅の夕に說かれた大涅槃經の中に、佛教信仰の事を說明して、『三寶に歸依するは佛教信仰の正路なり』とお說きになつて居る。この御教訓より考へますれば、三寶に依らざるの信仰は邪路なり、即ち邪なる路を行く者であるといふことは、頗る明白な事であります、故に釋尊の說かれた一代聖經を拜見すれば、最初の阿含經より唯今申す涅槃の夕に說かれた大涅槃經に到る迄、三寶に歸依する信仰を除いて佛教信仰を說かれた所はない。如何なる人にもせよ佛教信者の仲間入をするといふ時には、第一に「三歸」と稱して、自ら佛に歸依し奉り法に歸依し奉り、僧に歸依し奉る、この事は命のあらん限り、肉體のあらん限り、この信仰は變へませんと云ふことを誓つて、その決心が就いたならば佛教信徒たる事を許してやらうと云ふことになるのであります。同時に五戒といふものをお授けになつて、佛教信者は三寶に歸依するのみでいかん、同時に人の人なるべき道を行はなければならねと云ふので、五つの戒を守るべき嚴戒を與へられて、「これも亦謹んで守ります、」といふことを申上げるのが、佛教の信心に這入る法式といふものである。この法式を履まない者は唯だ遺傳的信仰で親が信心して居るから……子供の時分から佛壇に頭を下げさす樣に習慣をつけられたから、その惰力で信心をして居るといふのであつて、佛教の信念についての法式といふものに依らない者である。それが爲めに俗化した信仰となつて、唯だ佛壇の前に行つて鉦を叩いて頭を下げてムニャ〳〵と言へばそれで宜いといふことになつてしまふのである。佛教は第一に精神の意識を尊んだる宗教で、無論佛壇の前に頭を下げることも、掌を合せることも結構であるけれども、頭を下げ掌を合す前に、心に歸依渴仰を捧げる意識といふものを鮮明に

せんければ、佛教でないといふ事になつて居る。他の婆羅門などの教が形式の方から這入つて色〻弊害を生じたから、釋迦如來は形式の方を後に廻して精神の方から宗教の大改造を試みたものであつた。その事は阿含の諸經に盛んに說いてあります、佛教の言葉では之を「三業相應」と言ひます。世間では「言行一致」などと云ひますけれども、言行と云つただけでは言ふことゝ行ふことで、心が拔けて居る、總てさういふ風に僧者などの言ふ事は、佛教から見れば考へが淺いのである。佛教は心に考へる事と口に言ふ事と身に行ふ事との三つが合するのを善いと言つてある。けれどもその中でどれが一番言いかと對立的に考へる時には、心が一番重いから信心といふのである。信心といふことは、心に歸依渴仰を捧げるといふことである、口にお經を讀むとか、唱へ言をするとか身に頭を下げるとか云ふ事は第二に起ることで、嚴密に佛教信仰の意義を調べて行く時には「一業成佛」といふ事に結着して居る。一業といふのは精神のみで行けるといふことである、けれども唱へるといふことは精神を助けるものである。頭を下げるといふこともその精神を現はすことであるが故

に、之を併せ行ふことは宜いけれども、併し何が一番善いかと云ふと精神の問題である。左樣な譯であるから三寶に歸依するといふ意識が亡びた時には、最早や佛教徒でないのであります。今日はどうも佛教の議論が餘程緩漫に流れ、墮落して居る、釋尊の前に行つて調べられたならば、假令如何にお經を讀まうとも、如何にお祥儀をしやうとも、精神に三寶に歸依する意識が枯れて居るとか、紊れて居るといふ場合には、佛教徒でないといふ判決はモウ零ねないでも分つて居る、どうしても其處から佛教の信仰に進み行くべきである。又その點を嚴密に教へて行けば今日の佛教が復活するであらうと思ふ。然らば三寶といふはどういふ意味合であるかと云ふと、これも段々面倒な議論が起つて居るけれども、兎角議論倒れの事が多いので、議論ばかりあつて意識は何も無くなつて居る。親を有難く思ふのはどういふ風に思ふのだといふ議論ばかりして居つて、死ぬ迄親を有難いと感じもせず孝行の行もしないと云ふことになれば誠に無駄な事である。佛教の學問もどうかすると議論に日が暮れてしまつて、實際にそれが働かぬと云ふ樣な事になる。學者といふものは多くそれであつてさうして一般信仰は俗化したのである。議論倒れの奴と形式倒れの奴とに依つて、佛教が今日のやうな狀態になつたのであるから、もつと手つ取り早く能く意識して、その意識したるものを、十分發揮して行くやうにしなければならぬ。

さうすると佛といふのは何であるかと言へば、これは申す迄もなく釋迦如來のことである。釋迦如來が教を說かれて居る、その大人格者たる釋迦如來が佛樣である。佛とは何を意味するかと言へば、その智慧は絕對の覺を開いて宇宙の大眞理に徹底し、下には衆生の心を見通すことに於て一分の誤りもなく、彼等の性質、彼等の慾望、彼等の罪惡、彼等の向上性、何を御覽になつても、上には眞理を握り、下には衆生の心を照し、而して之を導く所の方法手段に於ても一點缺ける所が無いといふのが如來の正覺である。さうしてその一面には非常な慈悲親切が燃るが如くに伴うて居るが故に、その明晰なる智慧と、燃ゆるが如き慈悲とに依つて人々を濟度するといふ所に、佛の人格といふものが現れて居るのである。若しその釋迦如來が人を救ふ力の無いといふものであつたならば、佛ではないのである。佛といふことは人を教へ人を救ふ力の完成したるものに向つて附けられて居る言葉である。釋迦如來自ら佛道を成就して「我は如來なり、我は法王なり我は大慈悲者なり」といふ事を名乘つて居られるので、法を說く始より、一切衆生の教へ主であり、救ひ主であり、一切衆生の父であり、師であり總べての德をお備へになつて居る者である。この事も佛教者として反對する事は出來ない、佛教が嫌ひだと言うて惡口を言はうとする者は別だけれども、釋迦如來の教の方に向つて掌を合せて來るといふには「お釋迦樣は有難いと言へん、少しは、きづがあります」といふやうな事を云ふ必要はない、絕對の歸依を捧げて來るといふことが條件である。讃佛偈といふのはどのお經にも現はれて居るけれども、釋迦如來の德を讃歎し、釋迦如來に歸依を表白するに於て缺けた所があるといふやうな意味を言うたお經は棄にしたくも無い。「何を以てかその德を讃歎せんか、言語盡き思ひ盡きて申し樣が無い、けれども、せめて自分の胸に今動いて居る一點を申上げます、それは恰も大海の一滴の樣なものであるが」と言つてその自分の讃歎の足らざる事をお斷りして居るのである。「斯う云うては少し褒め過ぎますが」と云ふやうな事が一點でもあるものではない。然るに後代佛教徒でありながら、釋尊の德を削るが如き議論に熱中するに至つてはこれは叛逆人であるといふことは頗る明白な事である。それ故に佛樣に歸依するといふことは、自分のあらん限りの精神を捧げて智慧の方から親つても、情操の方から親つても、何から親つても佛樣は完全無缺な方である。智慧の方から行けば、大眞理を覺つて御座る所の大覺者、如何なる事柄でも釋尊のお覺りなさつて居らんとは無いといふ事を信ずるのである。情の方から言へば、佛樣の慈悲親切には一點缺けたる所が無い。時間で言へば夜も晝も、事柄で言へば如何なる事に就ても、憐みを垂れて下される優しいお方であるといふ事に、滿腔の感謝を持つのが佛教徒である。又吾々の意思がこれに向つて善い事をしやうと云ふ時には、佛は吾々の德の模範であり、善の模範であり、而して吾々が善い事をしやうといふ力を助けて、自分が正義の爲めに闘ふ時分には、その味方として飽く迄も之を援助して下さる方である。佛を味方にして闘ふならば、正義の闘ひに恐れる者は無いといふことを佛教徒は意識してかゝらなければならぬのであります。左樣な點

大事なことナンである、面倒な理窟を「起信論」で學んだとか、「四教儀」で學んだとかゴチャ〳〵言つて見た所が、詰り佛樣に對して今申すやうな絕對の歸依を捧げることが出來ない訳は、佛教徒たるの資格を有しないものである。そこで釋迦如來は如何にも緣い方であつて、吾等の歸依すべき對照としては一點申分がない。他の宗教に於て信仰を捧げて居る總ての神々の尊敬者よりも、我が釋迦牟尼佛は更に優つて尊い方である。若し天の神を信ずるならば、釋迦牟尼佛は天の神のその神樣である。そのお師匠樣である。吾々が或る哲學者を敬くならば、その哲學者の更に大きな大哲學者である。吾々が或る德行の人を敬めるならば、その有德の人の更に大なる、最大なる有德者であるといふ意味に於て、何が現はれて來ても釋迦如來に對する歸依渴仰を橫切らない樣に、絕對に歸依するといふことが佛教の信仰であります。

「次に法とは何を指すのであるか、これも法の內容が色々に分れて、眞理そのものを法と觀たり、或は自己の本體を法と觀たり、左樣な事にこの法といふ字が働いて居るものであるから、學究的の人には「法に歸依す」とは何に歸依する事だか分らなくなつて居るけれども、佛教徒が歸依する三寶の中の法といふのは、明かに釋迦如來の說かれた教を指すのであります、若も教に依らずして直接に宇宙の眞理に向ふといふことであるならば、それは哲學であつて宗教ではないのである。自分の智慧に依つて、釋迦の力を藉らず、教を藉らずして、直ちに宇宙の眞理が發見し得られるといふならば、佛教信者とならずして哲學者と成つて居ればそれで事が足るのである。佛教に頭を下げて、佛教に歸依するといふ事は、釋迦如來の御智慧を通じ、釋迦如來の教となつて現はれたるその教化に服從するといふことが佛教徒の心得であります。無論釋迦如來の教は眞理をお傳へ下さるものであるけれども、吾々が直接に眞理と思ふ事よりも、もつと正確に佛の大智慧を以て能く嚼みこなして、吾々に領解すべく之を通達して下さつて居るのであるから、直接眞理に向ふよりもつと正確であるといふことを信ずるのが佛教徒である。自分の智慧で認めた眞理は時に誤謬に陷るけれども、佛の教を通じて興へられた眞理は、更に正確なるものであるといふ事を信ずるのである。又佛教の教といふものは、唯だ眞理の教ばかりではない、

先に申す慈悲の教であつて、その教を通じて人々の有つて居る優しき德性が啓發されなければならぬ、近來の人は唯だ眞理〳〵といふけれども、眞理に依つて人格が磨かれるのは吾々の理智のみである。德性を磨くには德を導き出す所の慈悲の教化といふものを受けなければならぬ。如何に學問をしても、棄兒であるとか、寄宿舍に於て苛められたとか、朋友から冷遇されたとか云ふ人間は、學者になつても拗れた頭で、理窟は能く知つて居るけれども、更角捻曲りのやうな人間に成つて、世を騷がすやうな下らぬ議論を吐いて面白がるといふ人間が出來る。それは即ち理智の一面は發達するけれども、人間の德性といふものが少しも伸びないから、そのやうな出來損ひの者になるのであります。吾々佛教徒は釋尊を通じて教へられる、其處には唯だ哲學者と成るのではない、一方には釋尊の大慈大悲に感孚して、この慈悲の羽搖の下に暖められて孵出る卵であるが故に、その生れる雛兒は極く溫かき人間の德性といふものを開發して行くのである。即ち佛教の教は眞理の教であると同時に、慈悲の教である。

又佛教の教は最も分り易く說かれて居るのであつて、譬喩に富んで居る所の教である。譬喩とは困難な事柄を領解し易き方法に依つて、吾々に嚼んで啃めて下さる所の教である。これが又非常に大事なことなので、如何に眞理にせよ、或は溫かき德にもせよ、それを教へられても吾々低き人間が理解することが出來ず、それに依つて我が德性を開發することが出來なければ、教と自己との間に距離を生じて効能を生じない。然るに智慧ある者は無論滿足を得るが、智慧なき低き者でも佛教の教に依つては、その廣大なる眞理、その無限の慈悲といふものに感孚する。即ち最も分りの宜い、こなれた、嚼み碎いた教へ方といふものが佛教の特色である、釋尊が殊に努力し給うた親切の現れといふものは其處にあるのである。今日の人が唯だ西洋の哲學などを生嚼りにして彼れ是れいふて居るが、これは半生で分つて居らぬのである。その證據には西洋の哲學の結果はどうなつて居るかと言へば、人をして疑ひに陷らしめ、人をして信念を開發する事を得せしめず、確乎たる目標を定めることが出來ずして、何事も取調べて行けば宜い加減のもので分らぬものだ、さうすれば何方に行つても宜いやうなものだといふやうな懷疑の精神、やけくその

精神、我慢の精神といふものを傷つたのである、確かにさうなつて居る。だから何を言うか分らんものだ、餘計理窟を研究して居る者は餘計饒舌り立てるものだといふので、唯だ哲學といふものは面倒な事を饒舌り立てるものであるといふ風になつてしまつて居る。そんなものは吾々に正確なる智識も與へず、信念も與へず、德性も啓發しない、これは非常な失敗である。左樣なものは有害無益であつて、哲學ありと雖も吾々に信念を供給しないならば、哲學の役をなさんものである、哲學は帝王の學であるとか、原則の更に原則を教ゆるものだとか言つて非常に威張つて居るが、その親玉が不透明な事になつて來るといふのであるから、丁度軍隊で言へば司令長官が部下に向つて、貴樣は旅團長ぢやないか、貴樣は師團長ぢやないか、俺のこの軍團長の命令を聞かんければいかん」と言つて叱り飛ばす、「然らばあなたは何を御命令下さるか」と言へば、「一寸待つて呉れ、俺にも何だか分らん」と言つて酔ばらつて管を巻くやうな事になつたならば、その軍隊の活動は出來るものではない。所が西洋の文明は、丁度この軍團長が酔ばらつたやうな事になつたものであるから、後の者が行くべき道を迷ふことになつたのである。彼等は實に憐れな者である。所が佛教は洵に偉大なる眞理を唯今申すやうに因緣因緣を通じて嚙み碎いて、如何なる低級なる者にも領解し易きやうに與へられたから、柔順に佛教の教に來つたならば、如何なる者でも一通りの人身觀を得、宇宙觀を得、超人觀を得、その他非常大なる人生の間に立つて迷はないだけの大眞理を握つて信仰に入ることが出來るのである。試みに無智蒙昧なる一老婆を捉へ來つても、彼が能く佛教の事を聽いて居るといふ者ならば、それに就て人身觀を聞いて御覽なさい、言ひ現し方は粗末であつても、その中には拔く可からざる萬古不易の眞理を握つて、彼は人身觀を得て居るに相違ない。彼が宇宙を解釋するに就ても、總ての西洋哲學者、西洋宗教家の及ばないだけの確乎たる眞理を握つて、信念に達入つて居る者である。之を生者なる者が分らぬものであるから、「お前の言ひ方はノロ〳〵して居て駄目だ」とか言つて、手續きの方の巧拙の爲めにその決定して居る信念を嘲けるのである。西洋の學問は總て手續き倒れである、手續きは中々宜いけれども結論に行く時分にはダジャ〳〵になつてしまふ。

其處で佛樣の教には、左樣にして數へて行くと非常に善い事が澤山ある。今暫く眞理の側に就て一言するならば、最初阿含をお說きになる時から佛教の不磨の眞理となつて居るものは、因果應報の理と稱して居ることである。これは日本人が誰も聞き覺えて居ることであるけれども、その教の意味が徹底して居らぬから嘲ける者があるのであるが、能く研究して見たならば、この一言と云ふものは萬世拔く可からざるものである。如何なる事柄でも原因結果の關係があるといふ事は、眞理の大前提である。原因無くして生ずる物は一つもない。之を否定せんとしたならば、何事も分らなくなつてしまふ。故に原因結果の法則があらゆる事柄に應用されて、醫學は人の疾病の發生する原因、その疾病を除き去る原因に就て研究して、さうして醫學といふものが發達して行くのである。何がこの病氣の原因であるか、どうしたらこの病氣を除き得るかと云ふ、その原因結果の關係が明くなりさへすれば宜いのである。今日のやうに流行感冒なら流行感冒が流行つて來た、これは斯樣にして黴菌が傳播するのであるから、或は注射に依つて豫防し、或は口覆に依つて黴菌を吸ひ込みさへしなければ心配無いといふ事が明かになれば、感冒が流行つても何等恐るゝ所は無いのである。それと同じ事で、如何なる事でも原因結果の法則を應用して行かなければならぬのであるが、唯だ獨り西洋の學問に於て缺けて居るのは、人々がこの世の中に生れて來た事、又死し去つて行く事、この自分自身の上に生じ、上に滅する人身觀の上に於ての原因結果の關係といふものが分らんのである、人間の魂といふものに對する事が分らない。だから宜い加減に「魂は神樣が呉れたものぢや」ナンといふ、神樣が呉れたナンと云ふ事は抑々非論理極まつた事であるから、智識の進歩と共に左樣な思想が打倒されて、今度はそれに代ゆるに「魂といふものは無いものだ、人體は物質ばかりのもので、魂とは物質の運動である」と言ひ出した。即ち「精神の作用といふものは、物質の組合せに於ての響きと運動である」と言ふ。であるから人なら人が死んでも、後に魂なんと云ふものが殘るものではない、大根を切つたのも人間を斬つたのも同じ事である。活きて居る間は人間と大根は違ふ、人間は運動が少し精密であるけれども、それは機械が精密なだけで、パッと運動が止つ

た時には、大根をブチ切つたのも、人間をブチ斬つたのも同じことちやといふやうな思想になつて來た。其處で非常に人間に殘忍酷薄な性質も起り、又殺生もそれから起つて來た、それは即ち人の生命の問題が不透明になつた爲めである。近來僅かにオイケンといふ獨逸の學者が「生命哲學」といふものを開いて、生命は久遠より來て永遠に行くものである、之を明かにしなければ文明の一歩も開かれんと言つて、之を明かにして、初めて夜が明けるのだと云ふやうな事を言ひかけたけれども、戰爭が始つたものであるからオイケンは何處かに飛んでしまつて、今日はやはり生命の問題は元の李阿彌になつて居る。戰爭が無かつたならばオイケンといふ學者が日本へも來ると言うて居つたから、彼が日本に來てさうして哲學といふものは生命の事を明かにせんければならん、原理原則といふやうな事ばかり言つて居つては駄目だと言うと、日本の哲學者も「さう言ふものかナー」と思うて、今度は「生命生命」と言ひ出すやうになつたらうと思ふ。それを言ひかけて居つた所が、戰爭の爲めにその聲も聞えなくなつてしまつた。向うで言はなくなれば日本の學者も言はぬと云ふ約束があるものと見えて、今日は誰もそれを言ふ者はない。洵にその點は恥かしい次第であるが、生命の事が西洋に於ては分らないのである。所が佛教の方は釋迦如來が始めから、人の生命といふものは始め無く終り無く存續して居るものであつて、業の力に依つて人の果報といふものが生ずるのである、さうして或る者は人間に生れ、或る者は畜生に生れ、或る者は天に生れ、或る者は佛にも成れるといふこの因果の理を以て生命の流轉する事を說明したのが佛教の根本論理である。それが段々詳しくなつて、法華經の一念三千論まで發達進歩して居るけれども、釋迦はその通り最初から言つたのである。婆羅門教に於ては、耶蘇教と同じ事を言つて居つた、耶蘇教ナンといふものは婆羅門教の焼直しと言ふか、婆羅門教よりズツト淺薄なものである。婆羅門の哲學は印度の人の頭を通じて現はれて居るだけに、耶蘇教のやうな淺薄なものではない。それは今日の學問で調べて見れば、天下の定評のあることである、ウパニシヤツドの哲學とか、その他印度にあつた婆羅門哲學といふものは、六派哲學と言つて中々偉大な哲學である。併ながらその中にやはり一種の創造の神があつて、大梵天王とか大自在天王とか言つて居る觀樣があつて、それが人を造つたといふ「梵天は我等の父なり」と言つて居る。耶蘇教の「天にまします我等の父よ」といふ事は、六千年も前から印度に於て言うて居る事である。所が釋迦如來は「それはいかん」と言はれた、父といふやさしい觀念は、釋迦如來も「我は父なり」と仰しやるけれども、この魂を生んだ父といふ事は言へない。人間の親が子を生むやうに、魂そのものを生れる時分に神がフツと吹込むと云ふが、彼處の女房には姙娠させてやらなければならぬと言ふので、フツと吹き込むと、神樣の息が飛んで來るのか知らんけれども、兎に角魂が飛んで來て、子供が出來ると云ふ。それも神樣の魂の一部を分けて與れると云ふならば分つて居るが、然らば人間の魂といふものはもつと完全に出來なければならぬ筈である。併し現在の人間の魂の有樣といふものは、どうも神の方から分けられたやうには見えない、其處で基督教では「元は神樣に分けて貰つて立派なものであつたけれども、蛇に騙されて罪を得た」といふやうな事を言つて誤魔化すのであるが、中々性癖の多いものであつて、どうも神の魂を分與されたものとは見えない。それはどうしても西洋のさういふやうな學說は淺薄であつて、常識の發達した上からも認められないものであると思ふ。唯だ不思議に思ふのは斯樣な宗教に依つて長い間西洋人が信仰を繫いで來たといふ事に於て、西洋人の智識といふものは割合に低級のものぢやナといふ事を自分は認めるのである。東洋人に於ては左樣な思想は、少くとも三千年前にブチ破られてしまつて居るので、今日婆羅門教と佛教との優劣に迷うて、佛教より婆羅門教の方が宜しいと云ふやうな愚な事を云ふものは、先づ一人も居らんのである。尤もその教を離れてしまつて下らぬ事に囚はれるものは別である。今日でも大本教とか云ふやうなものが起つて、靈魂などと言つて妙な事をやつて居る者もあるけれども、それは俗信、迷信といふもので、學問の上に於て佛教の教理が如何なる價値を持つものかといふことは、定論のある事である。故に婆羅門教などは、日本には類出しもしない、建國以來印度の婆羅門教を信ずると名乘つた者は一人も無い。併ながら佛教を奉ずる者は、斯の如く殆んど國民の全部に弘まつて居る譯である。それは即ち釋尊の教が眞理である證據であ

る。耶蘇教のいふやうな事を知らずに、日本人が佛教を採つたものではない、彼が言ふやうな事は、印度の婆羅門教として佛教の中に詳しく說いてあるから、誰も學んで居るのであるけれども、「左樣なものはいかん、因果の法則に外れたものであるから」と云ふので、之を採らんのである、其處でそれが又道德律となつて、人が善い事をしたならば、その善い力といふものは　自分をして幸福ならしむるものである。惡を爲したならば、一時法律から免れ、社會の制裁から免れても、罪惡そのものは己れを導いて苦みに至らしむるものである。その善を爲し惡を爲すと云ふ力は、この世を或は上し或は下すものであるといふ、自分の爲す業の力といふものを確信して居るものが佛教である。これは非常に進歩したる思想である。西洋ではデモクラシーなどと云ふけれども、どうも思想が矛盾して居るので、全智全能の神を信ずれば、殆ど神の力に依つてのみ人は左右されるといふやうな有樣である。神が之を救はうと思へば救はれるし、如何なる善い事をしても神に認められなければ救はれないといふ。釋迦のやうな偉人でも孔子のやうな聖人でも、天照皇太神でも、耶蘇教の神に認められない限には救はれない、やはり罪の子であるといふやうな事を言ふ、洵に詰らん事である。その代り又惡い事をした者でも、羅馬法王の所に行つてお懺悔を上げてお札を貰つて、「この者は無罪ぢや」といふ證明をして貰うと、神の名代たる法王から無罪の札を貰つたといふことになれば、如何なる罪惡を犯した者でも無罪ぢやといふ。所謂官僚式といふか、非常に壓制武斷の態度が宗教の上にあるのである。佛教は、鬼が汝を地獄に伴れて行く譯でもない、神が汝を天國に導くのでもない、汝の爲したる善汝を幸福ならしめ、汝の爲したる惡汝を墮落せしむるものであると說いて居る。以上は唯よ〳〵佛教の眞理の教であるといふ一端をお話したのであるが、それが次第に進んで法華經の方便品に來ればあの通り諸法の實相といふことを說き現して、一念三千の教となつて現れたやうな大眞理が結晶して居るものが佛教である。それが或は分れては華嚴の哲學となり、天台の哲學となり、燦然たる佛教哲學の思想となつて現れて居るが、その源を尋ねれば釋迦の教の中に眞理の方面が開發されて居るが爲めである。

（此篇未完）

聖經

信仰と道德

本多日生

王ノ言ク、何等ヲカ誠信ト爲スモノゾ、那先ノ言ク、誠信トハ人ノ疑ヲ解キ、佛有ルヲ信ジ、經法ヲ信ジ、比丘僧有ルヲ信ジ、羅漢道有ルヲ信ジ、今世有ルヲ信ジ、後世有ルヲ信ジ、父母ニ孝スルヲ信ジ、善ヲ作サバ善ヲ得ルヲ信ジ、惡ヲ作サバ惡ヲ得ルヲ信ジ、有ヲ信ズ、是ヲ以テ後心便チ清淨ニシテ五惡ヲ去離ス、何等ノ五ゾヤ、一ニハ婬欲、二ニハ瞋怒、三ニハ睡臥、四ニハ歌樂、五ニハ疑ナリ人是ノ五惡ヲ去ラザレバ心意定マラズ、是ノ五惡ヲ去ラバ心便チ清淨ナリ、那先ノ言ク、譬ヘバ遮遮越王ノ如シ、車馬人從廣度シテ水ヲシテ濁惡サラシム、過渡以去ニ王渴シテ水ヲ得テ飲マント欲ス、王ニ清水珠アリ、水中ニ置クニ水即チ清ムヲ得、王便チ清水ヲ得テ之ヲ飲マン、那先ノ言ク、人心ニ五惡有ルハ濁水ノ如シ、佛ノ諸弟子生死ノ道ヲ度說シ人心清淨ナルハ珠ノ水ヲ清マスガ如シ、人諸惡ヲ却ケ誠信清淨ナルハ明月珠ノ如シ。

（那先比丘經、正大藏第二十六套ノ九）

那先經と云ふのは彌蘭王が那先比丘に向つて佛教の要諦を尋ねられた、それに對して那先比丘が六つの事柄を擧げて佛教の教義を的示したのであるが、この一節は六善事の第一『誠信』の意義を明して居るのである。

王が尋ねて言はれるには、今お話の六善事の中の誠信と云ふのはどう云ふ意味を指すのであるか。那先が答へて云ふには、誠信とは「人の疑を解く」、即ち種々の疑問を解決して懷疑的精神を追拂ひ、確信に導くことである。又その確信の

内容は、唯信念と云つても意義をなさぬが、何を信ずるかと云へば、即ち「佛有るを信ず」、佛は目に見えない場合でもその本體は實在であり、常に人々を護つて居られるものである。その有難い意味合を信ずるのである。又釋迦牟尼がお說きになつた敎を信ずる、それは普通に法などと云つて居るのとは違つて、誤りのない正しい意味合を敎へられて居るのだからその敎の主義に從ふて行かなければならぬ。又三にはその敎の意味を世に傳へる人、即ち僧伽と云つて、敎の精神に合した意味に於て世に敎化を垂るゝ者が僧伽である、僧伽と云ふのは和合と云ふことで、その仲間同士が和合することも意味して居るが、その敎に合する事が第一である。隨つてこの僧伽の内には「羅漢道あるを信ず」、羅漢と云ふのは殺賊と譯して居る、即ち煩惱の賊を殺して誤りのない聖者を指して居るのである。この羅漢道と云ふ言葉は後年小乘の意味に考へますけれども、こゝではさうではないので、法華經には「眞に是れ阿羅漢なり」とある、即ち煩惱の賊を滅ぼす意味合であるから、必らずしも小乘を指すのではない、大乘に於ても菩薩と云ふも、佛と云ふも、又羅漢と云ふも、意味に於ては違はないのである。その意味から云へば佛敎の敎に基いて煩惱の賊を滅ぼした、普通人より超越したる偉い人がある事を信ぜよと云ふのである、又「今世あるを信じ、後世あるを信ず」と云ふのは、この現在に於て爲したる仕事は必らず結果を生ずることを意味して居るのである、この世の中の事は皆偶然であり、原因も結果もなくして、運命などと云ふものは何處から吹いて來るか分らぬと云ふ風に考へるのはそれは間違いである。この世に現れたる事も皆原因があり、又この世に爲したる仕事も將來に結果を引くと云ふ、この因果律を信ずるのである。人間の生命の無限を信じ、又自分が爲したる行爲の善惡が結果を引くと云ふ關係を信じて行くのであります、次に以上は皆宗敎的の事でありますが、更に佛敎に於ては信仰の外に道德性を包含して居るから、一面には道德的なる「父母に孝するを信ず」と云ふことを說いて居る、子たるものは父母に孝を盡さなければならぬのである、孝は百行の基であつて、一切の德性を啓くのであるから、孝養は大切なるものであると云ふ事の確信に立つ。それから又「善を作さば善を得るを信じ、惡を作さば惡を得るを信ず」と云ふのは「今世あるを信じ」と重複して居るやうであるが、是は直接に善因善果を說明して居るのである、善因を作れば善果を得る、惡因を作れば惡果を得る事を信ずるのである。「有を信ず」と云ふのは、是は宇宙は決して虛無なるものでない、空なるものでない、實在なるものである。即ち諸法の常住を信じ、生命の常住を信ぜよと云ふのである、この世の中は煙の如きものであるとか、夢の如きものであるとか、幻の如きものであるとか、虛無であるとか云ふ事になれば、信仰なり道德なりは破壞されてしまふ、無と云ふも、空と云ふも皆是れ迷想を打破せんが爲であつて、それを結論の如く考へ恰も虛無の如き思想に陷づたのは大なる謬見である。今この那先比丘の云ふ佛法の常住は、生命の實在、諸法の常住を信ずる事を云つて居るのであります。

斯の如くにして種々なる事を確信するが爲に、その信念に導かれて、それから以後に發作する所の精神は皆清淨になつて來る、信念はその心を淨からしむる本である。隨つて五惡を除き去る事が出來る。「五惡」とは五官より起る罪惡であつて、五欲と云ふも同じである。眼に對する色、耳に對する聲

鼻に對する香、舌に對する味、身體に對する觸覺、さう云ふ肉體から起る所の五つの劣慾に依つて罪惡を作るのであるが吾々が信念を確立すればその以後に發作する精神は皆清淨になるから、五官の感覺が淨くなる、隨つて五惡を去ることが出來る。その五惡とは何であるか、一には婬欲（男女間の色慾）二には瞋怒（腹を立てる事）、三には嗜眠（無暗に睡眠を貪ること）、四には歌樂（人の劣情を誘發する樣な歌樂）、五には疑（懷疑の精神）、この五つをこゝには指して居るのでありますが、之を去らなかつたならば、「心意定まらず」で、淨い精神が確立しない、疑ふとか腹を立てることに依つて精神が動搖するから、この五惡を去れば隨つて精神の安定を得るのである、而してその心は清淨となるのである。斯く答へて那先は更にこの意義を明かにする爲に譬喩を擧げて說いた。

那先比丘が語り續けて言ふには、今申した意味合を領解し易いやうに譬を擧げてお話すれば、「迦迦越王の如し」、是は義に强い王樣が戰に臨むが如きものである。「車馬人從」とは軍用の車馬、それに從ふ所の人足である。其等が河を渡るには我れ先と爭ふて渡るから、爲に水が濁る。その時に王樣

が喝咽が渇いて水が飲みたいと思つたが、河の水が自然に清むのを待つて居れば、次から次へと渡るから容易に清まない その時に「王に清水珠あり」、水の濁りを清ます珠があれば、その珠を水の中に入れることに依つて、珠の威德に依つて水が清み、王はその清んだ水を飲むことが出來るであらう。恰度人間の心の中には、車馬人從が國度して水を濁すやうに、煩惱の爲に始終心を搔き亂されて居るけれども、その場合に信仰に依つて行くならば心の濁りは清むのである。五惡は心を濁す、それを佛弟子達が生死流轉の迷を濟ふてその心を淨くするのは、恰も「珠の水を清ますが如し」である。信仰は人間の心の濁れるを清ます珠である。種々なる惡い事を却けて、そうしてそこに精神の清淨を得るのは正に、明月珠の如しである、恰度優しい淨い光を放つ月のやうな珠が人間の心の中に輝いて居るやうなものである。一方には珠の水を清ますが如く心の濁りを去り、一方には明月珠の如く心の暗を破つて光を與へると云ふ意味に於て雙を擧げて居るのであります。

この誠信即ち宗教の信仰が人間の精神を淨め、隨つて行ひを善良ならしめるのである。今の狹隘なる宗教の信仰、唯一概に淨土門などで云ふやうに、阿彌陀樣は有難いと思つて居れば道德は要らぬと云ふのではない、單に信心して居れば道德は構はないと云ふのは全く佛教の正當教義でない、又佛教に依らない日本の道德學者、即ち儒者とか或は今日の教育家は、宗教の信仰を否定して、唯親に孝行さへして居れば宜いと云つて居るけれども、そこに根本的に因果律を信ずる佛教の宗教的精神を確立しなければ、どうしても清水珠と云ふものは出て來ない。それであるから佛教の信仰は今の狹隘なる誤れる信仰をも認めないし、又宗教の信仰を否定して居る淺薄なる道德も認めない、兩方の缺點を去つて良い所を擧げ、佛教とは斯う云ふものだと、先比丘は說いたのであります。日蓮上人が四條金吾に遣られた文章の中に「主の御爲にも法華經の御爲にも、よかりけり〳〵と鎌倉乃至日本國中の人々にほめられさせ給へ」と云はれた、主人に對する忠節も、法華經に對する信仰も、一般の道德觀念も併せて行ふのが法華行者であると云はれたのと、那先比丘の言とは一致して居るのであります。

教義　日蓮聖人教義綱要（第三十七）

井村日咸

第九章　得益

第二節　內外の二薰

佛陀は我等衆生の道を行じ行ぜざるを知しめして、冥に加し顯に護して我等が信念の熟するを鑑み給ふと雖ども、其根本は我等衆生の自覺に待たねばならぬ、如何に佛陀の慈悲深重なりと雖ども、自覺なき衆生は如何ともすることは出來ない、所謂緣なき衆生は度し難しである、經に矢心の者に其藥を與ふるに而も肯て服せずと說けるは我等自覺なきものゝ佛陀救濟の御手に縋り得ざるを言ふたのである。そこで佛教の中には內薰外薰の法門と云ふて大事のことゝせられて居る、祖判に

佛法の中に內薰外薰と申す大なる大事ありて宗論にて候。

（遺一六四〇）

とある、內薰とは我等が本來具有せる本有の佛性である、我等が佛性は其躰本佛世尊のそれと同じ實躰ではあるが、無始已來無明の酒に醉ふて、其本性を失ふて、常に妄念妄想の爲に邪徑に蹈入り、遂に今日の我等が如き六道輪廻を爲すの止むなきに至つたのである、經に所謂毒の爲に中てられて心皆顚倒せりと說けるは即ち我等の現在生活である、我等は心皆顚倒せりと雖ども、其心核は佛性であるから、機會だにあらば內部より外面に出でんと志す、即ち我等が向上的精神は、心核たる佛性の發現的傾向を現はしたる一部分である、丁度火山脈に於ける山岳の如きものである、機會だにあらば爆發せんとして、常に其內面に於て活動しつゝあるのである、之を內薰と云ふ。佛陀は常に其內薰爆發の機會を鑑み給ふて、外部より其發現を護助し給ふ、此を外薰と云ふ。內薰佛性の自覺の力と、外薰佛陀の護念の力とが結付いて、其處に我等が

佛性の發現と爲るのである。此狀態を御遺文に引例して詳細に御示し下されて居る、法華初心成佛抄に

凡妙法蓮華經とは、我等衆生の佛性と、梵王帝釋の佛性と舍利弗目連等の佛性と、文殊彌勒等の佛性と、三世の諸佛の解の妙法と、一躰不二なる理を妙法蓮華經と名けたる也故に一度妙法蓮華經と唱ふれば、一切の佛一切の法一切の菩薩一切の聲聞一切の梵王帝釋閻魔法王日月衆星天龍地神乃至地獄餓鬼畜生修羅人天一切衆生の心中の佛性を、唯一音に喚び顯し奉る功德無量無邊也、我が已心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉つて、我が已心中の佛性南無妙法蓮華經とよびよばれて顯れ給ふ處を佛とは云ふ也、譬へば籠の中の鳥なけば空とぶ鳥のよばれて集るが如し、空とぶ鳥の集れば籠の中の鳥も出でんとするが如し、口に妙法をよび奉つれは我身の佛性もよばれて必ず顯れ給ふ、梵王帝釋の佛性はよばれて我等を守り給ふ、佛菩薩の佛性はよばれて悅び給ふ　（遺一六九一）

とある、我等の佛性は無明煩惱の爲めに蔽はるゝが故に此を籠の中の鳥に譬へ、佛菩薩諸天の佛性は迷妄より脫出せるが故に、空飛ぶ鳥に譬へられた、籠の中より出でんとするは內熱であり、空飛ぶ鳥の籠の中の鳥を外に出さんとするは外薰である、此內外二薰の力合成して佛性發現の効果を收め得るのである、茲に於て我等が佛教信仰の根本は各自の佛性の發現、大自我の發現であらねばならぬことが分るであらう、我等の自覺に對して佛陀神明は冥に加し顯に護して、我等を督勵鞭撻せらるゝのである。現今の佛教徒の多數が、各自の自覺を等閑にして、佛陀より御利益を頂戴すると云ふ樣な乞巧的信仰をなして居る人々の樣であるが、神明佛陀は我等に對して何物をも惠與せられざるものなることを思はねばならぬ、佛陀は我等が本有の佛性を開示悟入せしめんが爲に世に出現し給ふたのである、我等自ら本有の佛性を忘失しては遂に迷界を說するとは出來ぬ、佛陀の護助に依り我等本有の佛性の發現せるもの此を得益と稱するのである。

第三節　得益の種類

因果の法則は精神界物質界を通じての大原則であつて此を否定するものは天則を破壞するものである、法律と云ふも道德と云ふも此大原則より發して來たものに外ならぬ、故に佛陀は因果の法則を撥無するものを以て罪惡の中に最も大なりとせられ居る、因果律を撥無するものは法律道德を破壞するのみならず、天則に背くが故である、佛陀の教法は因果の原則を尊重して我等の日常の善惡の行爲は善因善果惡因惡果の結果を生ずることを說き給ふた、今我等が佛教信仰の修行に於て其因に酬ひて相當の果實あらねばならぬ、即ち佛性發現の道程に於て夫々の効果が實現せらるゝのである、此を得益と云ふたのである。法華經藥草喩品には佛陀教化の目的を說いて、

一切枯稿の衆生を充潤して、皆苦を離れて、安穩の樂世間の樂及び涅槃の樂を得せしむ　（縮法一七二）

と安穩の樂世間の樂とは現在我等の實生活に於ける救濟である、涅槃の樂とは未來絕待の益にして佛陀の證悟即ち佛性の發現を云ふたのである、佛性の發現は最後究極した處であるが、我等は一足飛に前に至ることは出來ない、相當の道程を經て茲に達するのである、大體に區別すると左の如くである

得益
- 世間益……現在相對の益
- 出世間益
  - 假益……
  - 眞益
    - 分得
    - 滿得
    - 未來絕對の益

世間益とは現在實生活の上に實現せらるゝ得益である、經に安穩の樂世間の樂と說きしものにて、現在世に於て、我等煩惱の一部分を制壓して其苦患より免れ得るを言ふたのである、出世間益とは佛性發現に一部分進行した處である、最初は進退不定なるが故に之を假益と言ひ、後心に至つて不退の位に至る時之を眞益と云ふ、未だ究竟せざるを分得と云ひ、究竟圓滿の大覺位に至るを滿得と云ふのである。天台大師は圓教に六即位を立てられたが、之を配當すると左の如くである。

理即……一切衆生皆佛性を有す信不信に拘らず
名字即……世間益
六即
- 觀行即
- 相似即……假益
- 分眞即……分得
- 究竟即……滿得
- 眞益
- 出世間益

無量義經に十功德を說いてあるが、此十功德も要するに世間益出世間益の兩種を說いたに外ならぬのである。

雜錄

私の婦人觀

安西千賀夫

俗に子供の無い者は子供が解らぬと申しますが、誠に明言であります、私は婦人問題に關しては全くの門外漢でありますのみならず、又其の接觸して居る婦人は自分の妻か、左なくば二三の知己位な極めて小範圍に止つて居るのでありますから、子供の解らぬのと同樣、婦人の心情を解し得べき筈がないのであります、從つて私は皆樣に御話を申上げる御引受を致しはしたものゝ、輕卒に御引受を致した事を後悔したのでありますが、更も角掲げましたる題目の下に私の考へて居ることを申上げますから、暫時御淸聽の程を願ひます。尙一言御斷り致しますることは、本日は御婦人である皆樣に申上げるので、男子に御話するのでありますから、男子を攻むる言葉は省略してあります、此の點は豫め御含み置きの程を願ひ度ひのであります。

扨て私は豫て日本人は亭主の方がノシクリ返つて歩いて行くと、細君の方は後から附いて隨つて行く、之に反して西洋人は細君の方がノシクリ返つて行くと、亭主の方は小さくなつて隨いて行くと云ふ話を聞いて居りました、が尤も近年はどうかすると日本でも細君の方がノシクリ返つて歩くのを見ないでもありませぬが、昨年濠洲に參りまして、いやと云ふ程此のノシクリ返つた所を見せつけられたのであります、實にあちらの婦人は能く言へば活潑、惡く言へば御轉婆なもので、大の男をはねのけて、大股で歩いて居りまする處は、淑德の淑と云ふ字はアチラでは無いのではないかと思つた程であります。併し只そればかりなら、如何に御威張りになつても公安を害する所はないのでありますが、西洋婦人と來ると實に厄介千萬なもので、會々同一の食卓にでも着かうものなら、それこそ最後、やれ砂糖を取つてやるとか、やれ鹽を取つてやるとか、恰も其の婦人の召し使にでもなつた樣に、一々面倒を見てやらねばならぬので、大丈夫の面目は丸潰になるのであります。併し是等は食卓に着く場合に豫め注意すれば絶對に避け得ぬ事でもないのでありますが、茲にどうしても避け得ぬのはホテルやアパートメントのエレベーターに乘つた時で、若しも女が乘つて來れば、識ると識らざるとに論なく、男子は一齊に脫帽しなければならぬ、然るに女は知らぬ顏をして隅の鏡で髮の後れ毛をかき上げて居る、又男子は出るときも小さくなつて、隅の方から女の尻に隨いて出なければならぬ、若し之をしなければ禮節を心得ざる田夫野人と輕蔑せられるのであります。固より禮義であると考へれば難作もない事で、又鄕にあつては鄕に從へと云ふ諺の如く、其の國にあつては其の國風に從はなければならぬ事は、百も承知は致して居りますものゝ、私共には之が中々の苦痛であつたのであります。併し此の苦痛も尙其小なるもので、今一つ私が殆ど堪へ兼ねた事があるのであります。

外でもありませぬ、シドニーから歸途の船中で、私のテーブルの向の隅に二人連の婦人が食卓に着いて居りました、初めの程は別に氣にも止めなかつたのでありますが、一日二日と日數が經つに從つて此の婦人に付き疑問が起つて來た、即ち此の婦人連は食堂に出た時は美々しく着飾つて居りまするが、其の他の時間は普通の御客の出て居る一等船客の甲板に出て居ないので、多くは二等船客のデッキと一等船客のデッキとの中間にある少し低い所で、各三四人の子供を遊ばせ、其の側に丈の高い四十前後とも見ゆる頭の禿げたカーキ色の軍服を着けた軍人が居るのを見受くるのであります、一等客ならば一等船客のデッキに出て居ればよさそうなものである、其の上彼等が遊ばせて居る子供や、側の軍人なども滿更他人ではないらしい、そこでいらぬ事ではありまするが是等婦人の身元調を致して見ました所が、彼等は疑もなく夫婦で、又子供は肉親の子供なのであります、そして彼の軍人は日本で申しまするならば、陸軍の曹長に相當する格で、此度木曜島の守備隊に派遣せられ、今や赴任の途中で、細君の方は一等に乘せ、主人の方は三等で我慢をして居るのであります、元來斯樣な例は西洋人としては決して珍らしいのではないのでありますが、私共日本人の慣習から見ますと何分にも氣持が惡い、彼奴如何程身體が弱いのか、又船にはどれ程慣れないのか知らぬが、有つ丈の衣服を着飾つて、白粉などもこてこて塗つて一人前の食事は不足らしい面をしてペロリと御

平げになる所から見ると、左程窮い樣にも思へない、それに何ぞや亭主は三等の汚穢い室に寂しく拧し込めやがつて、己は三倍も四倍も要する一等賃銀を拂つて、敞然と納まり返つて居やがる、何たる不心得の奴であるかと思ふと、如何にも小面が憎い、食堂で彼等と共に食事をするのが嫌になる、否折角衣を改め、心氣を清浮にして行つた積りでも、いざ同席となると自然に一種苦痛の表情が表はれて來るのを免れない、女の顏を見ると何分にも癪に障つて仕樣がなかつたのであります。

或日の事、私はソシヤルホールで獨り思に耽り、何分にも食事が氣持よく取れないから、席を他に變へて貰ふことを請求しやうかと云ふことや、一般西洋婦人に對する感想、殊に我邦婦人の美點等に付き思を凝して居りました時、偶然貴君は切りに考に沈んで居る樣であるが、何を御考になつて居るのかと云ふ質問を發せられた老紳士があるのであります。此の老紳士は私と食卓を共にして居る人で、年齡六十八歲、濠洲に渡つてから四十年、曾てはクヰンスランドの教育總長を勤めたと云ふ人で、容貌恰もグラッドストーンの如く、高き鼻、廣き額、寬なる肉付、銳かれども險しからざる其の眼光は、悠揚迫らざる態度と共に、直に人をチヤームするものがあつて、一見識を有して居られる紳士であるとは何人にも肯かれるのであります、只高齡の爲に足が惡いので、夫人に扶けられて今やメルボルンに嫁して居る娘を訪ねての歸途なのであります、爰に於て私は西洋に於ける男女の觀念、又今親しく目擊しつゝある事實に付て、具に私の疑問を述べ、氏の意見を求めたのであります。

時に氏は徐に椅子に腰を下し、莞爾として答へて曰く、如何にも御尤な御質問で、動もすれば婦人の人格を認めない慣習のあつたとか聞く東洋人から見れば御疑問の起るのも無理はない、又ホテルやアパートメントのエレベーターでは嘸御困りになつたであらう、又現に曹長婦人の伴に付ても御心地の惡いのも尤である、併し第一に御說明申上げ度事は、如何にも吾々の仲間では婦人を大切にするが、之は必ずしも婦人が嫌いから大切にすると云ふ觀念ではない、丁度親が子供を先きに歩かせ、又社者が老者の手を曳くのと同樣、婦人が體質上男子に劣つて居るが故に、强い者が弱い者を扶助する意味に於て大切にするのである、現に彼の兩女の如き曹長が若し裕であれば相共に一等船客になつたのであらうが、身分上の關係から旅費が不足する爲に一等客になれない、故に其の最も弱い、又船に慣れない細君のみを萬一の事があつて

はならぬと云ふ考から一等客にした迄の事である、又女を大切にする今一つの理由は、所謂需要供給の原則から來て居る、即ち女が少い、女が珍らしいと云ふ觀念から來て居るのである、世界に於て婦人を一番大切にするのは申す迄もない亞米利加である、之は彼の殖民地時代女が不足であつた時代からの遺習で、濠洲とても此の例に洩れぬ、併し近年に至つては合衆國に於ける婦人が其の祖先の有つて居つた程の特權を有つて居ない樣であるが、併し一般的に觀察して西洋婦人は之を東洋婦人に比べると浮つ調子で、外出好きで、又表面上は所謂女尊男卑の傾向のあることは否むことが出來ないが、併し貴殿等が御覽になる程女尊男卑でもなければ、浮つ調子でも無いので、矢張り婦人の本性は家庭的にあるのである、彼のパンカースト一派の如く參政權獲得の爲に檣を壞して議會に闖入したり、絕食して政府を手古摺せたりするが如きは、決して婦人の天性ではない、英語に於ても「わいふ」と云ふのは織女の意で、「どーたー」と云ふのは酸婦の義である、共に等しく家庭的である、會て獨逸皇帝は婦人活動の範圍を以て三K に限ると宣せられた、三Kと云ふのは共に K の頭字の付く廚房 (Kuche) 教會 (Kirche) 小兒 (Kinder) の三者である、否々吾々の金科玉條として崇拜するバイブルの創世紀に於ても、婦人は夫に從ふべきものなりと敎へられて居るのである、して見れば其の說線的例外的なものは別として、婦道の根本は矢張り東洋に於ける夫唱婦從の原則と同じく、西洋婦人も本來家庭的のものと見ねばならぬ、さればにや西洋に於ても婦人の龜鑑とせられて居るものは、家を外にして飛び廻つたり、夫を脚下に踏み付けてギユーゝゝゝ云はせる手合の婦人ではないので、悉く優雅溫良貞淑の婦人である云々。

私は此の話を聞いて胸中が一搖せられ、涼風一過清々しい樣な氣持になつたのであります、顧みるに儒敎の敎ゆる幼にして父母に從ひ、嫁して夫に從ひ、老て子に從ふと云ふ敎へ、即ち婦人は終始自主の人たらず、父母、夫、子供の爲めに其の終生を奉じて悔まず、外にありても常に墟邊を忘れず、營々として其小巢の爲に歌ふ所の崇高なる婦道は、私共の眞に敬服措かざる所でありまして、我邦が世界に冠絕して偉大なるのも、私は此の崇高なる婦道に培養せられたる結果ではないかと疑ふのであります、今茲に私が儒敎の婦道や或は賢母良妻の御話を申上げましたならば、或は時代後であると御笑になる御方があるかも知れぬ、現代は婦人の職業を論じ、男女の同權を論じ、婦人の參政權を論じ、婦人の開放などを論ずることが或は適應して居るのかも知れませぬ

が、併し釋尊は今から數千年前に於て父の恩よりは母の恩を高調せられ、抑も女性と云ふものは母として世に立つことが絶對無上の天職で、一切の希望、一切の力量、一切の慰安、一切の功績は子を通して發表すべきものであると宣はれて居りまする程、洋の東西、時の古今を問はず、婦人の天職は依然として人の妻となつて家を守り子を育てることにあるのであります、故に若も婦人問題と云ふものが妻と育兒と云ふ根本に觸れず、若は之を等閑に付するものでありますならば、私は之は問題の眞諦にタッチせざる虛僞、若は枝葉の議論であつて、眞面目に批評の價値なきものと思ふのであります、勿論社會は千態萬樣でありまするお故に婦人として妻となり、母とならざる、若くはなり得ない人もありませう、又或る時或る國に於ては徒に枝葉の問題にのみ花の咲く樣なことがないとも限らぬ、併しながら是等は寧ろ異例か、さなくば悲むべき社會の事で、婦人の天職が妻たり母たるにあることの眞理は決して動かすことを得ないので、婦人論は如何なる場合にあつても此の根幹を忘れてはならぬので、又婦人たる者は原則として此の常道を踏むことに心掛けねばならぬのであります、果して婦人の天職が人の妻となつて子を產み子を育つるにありとしますならば、婦道は先づ夫に對する自覺に始まると信ずるのであります、私は決して婦人の人格を無視するものではない、又決して婦人を男子より劣れるものと認むる者でもない、否々大に尊敬し、其の向上發達を祈つて止まぬものでありまするが、只婦人の天職は男子と全く異つて居ることを信ずる者でありまするが故に、私は婦人は夫に對する道として其の天性に基いて溫和にして淑德の高からんことを望むのであります、斯く申しますると何だか修身の講義の樣でありまするが、古書にも婦德婦容婦言皆溫和なるを善として居ります、此の優しき德より起つて夫を善化し、子孫を教化するのであります、此の事は物に隨つて物に隨ふる身なりと聖人は說かれ、佛敎では菩薩の本分を喪すと申されて居ります、矢の走るは弓の力、雲の行くは龍の力、男子の業は女の力であります、夫が世に立つて活動し、社會に貢獻し得るのは一に其家庭に於ける優雅溫良貞淑なる婦人の力に俟つのであると云ふことは吳れ吳れも御了解を願い度のであります、即ち女性は自ら社會の表面に立つて國家社會に貢獻すべき天職を有つて居るのではありませぬが、其の子を通じ其の夫を善化して國家社會に貢獻することに考へ及びますると、婦人の天職は如何にも高貴なもので、又婦人のみ有する權威で、婦人は十二分の慰安を得べきものであると、私は信じるのであります。然るに此の天性に背き其の天職を擲棄して、起てよ日本の婦人よ、起つて其の舊慣に反抗せよと、男子に對して職を挑むが如きは、眞に不自然背理の極であつた、新の如きは極めて不幸なる說線的婦人の仕業に外ならぬ者でありまするのみならず、是等の婦人は實に不幸な婦人であると信ずるので、遂す遂すも誤らざる婦人觀を抱くと云ふ事は社會の爲にも、御本人の爲にも極めて肝要な事と信ずるのであります。要するに婦人の天性は溫雅貞淑、其の夫を善化し、夫を扶け又子に依り、子を通じて世に立つべきものであると信ずるのであります。

（未完）

雛の聲

下足番

村岡本量

過る日本多日生猊下の御親敎が終つて、聽講者は講堂の出口に充滿しました。私は感じました、利欲盛なる世に、醉ひ狂つて瞬間の快樂を繰り返せる中に、法華經の講義を聽き、歡喜の心に滿てる人の何に尊きことかなと思へば、下足札を履物に換へて家路を急げる人々の心に同情せずには居られません、私は下足番の一人となりました。お氣の毒樣を連發されましたが、ナント美しい情操ではありませんか。尊きものは感謝である。私も御佛に報恩感謝の爲の一小事として奉仕したのである。妙法の會合には微細の事迄も喜びであります。是が若し劇場であつたならば、純なる感謝の聲が聞かれませうか。感謝は崇高なる喜びである、人は喜ばんが爲めには大金をも投ずる、然し金と引替の喜びは眞の喜びではない樣である、矛盾ではありませんか、是は標準が惡いからである、法華經を標準とすれば、一切大歡喜になります、受くるも歡喜、與ふるも歡喜である、人は此の心を永遠に續けたいと思ひます。

翌る日信者の某が本山に來まして、昨夜の下足番の話が出て、彼は喫驚したと申しました。私は其の人に云つた、法華經の釋には「大乘を學するが故に大乘の衆生と名く」とある、大乘とは妙法蓮華經丸に乘る事である、船長が釋迦牟尼佛で機關長が日蓮上人である、如何なる者でも此の船に乘れば眞の目的たる彼岸に達せられ、船長の有難さが分る、又船長の航海術と、機關長の努力とを信ずるより外はない、信ずる事は

目的を達する事なんである。然れば一佛乘の故に聽き、一佛乘の故に働く、兩者とも佛果を得べき菩薩の因行ではありませんか、玆に於て何ぞ僧俗の別あらんやである、唯だ佛果を賴む者と、佛の御使をする者との違ひではありませんか。然し義分を明かにする事は嚴でなくてはなりません、私は食物としては餘り嫌いなものはありませんが、棒鱈信者と骨無蛸坊主とだけはよう食べません、臭い丈で胸が惡くなります、成佛の故に信じ、成佛の故に使はれるのでなくては意義がありません、僧侶の燈心に信者の油を注いで佛樣の火が光りました時、闇黑の世界の中で、何れも怪しき手付、足付、腰付で、ビタ〳〵して居りました者共が、三力の火に照されて、正しき行と、業しき世界と、一家の團樂とを味ふ事が出來るのであります。

蚊軍と對陣

坊樣になると奇妙に血が減る、然し事實である、性の惡い蚊が無言の儘にてやたらに青坊主に止る、以前は敵に對する鐵條網があつたが、其時は此の人情の機微を味ひ得なかつた。道理で今は敵に露出せる青坊主を防禦すべくあらゆる手段を盡す、毒瓦斯否强烈なる名香綾やかに、設備十二分を極めたり、難攻不落の城塞は內閣育樂之介をして信賴せしむるに足るものあり、蚊軍の襲來なんするものぞ、眼下蜂屁破顏微笑の態たらく、更に我軍の御大萩原將軍のいでたちを見てあれば、絣絨の鎧美々しく、天晴れ三軍を叱咤するの概あり、天大將軍の降臨も斯やと思はる、賴もしき限りなり。されど敵も亦さる者、科學的攻勢のみに出ですして、魔法身を現じて、通力自在千變萬化を極めたり、我が城兵の淨血を吸ひ盡さんとす、嗚呼危機迫る矣。于時、天鎭の梵音聲あり、「若し蚊軍に惱亂せられて定心を破らば、城者として城を破るが如し、相構へて〻〻〻强盛の大信力を致し、異體同心にて南無妙法蓮華經と唱へ、生死一大事血脈は全く外に求むべからず、若し然らば廣宣流布の大願も叶ふべき者か、臆病にしては叶ふべからず、獅子王の如くなるべし、小欲知足の勇を鼓舞し、若靠共二陳三陳續け、難來るを以て安樂行と思ふべく、其の外の大難風の前の塵なるべし、身命を期とすべきの覺悟は城則なり、純潔なる血脈擁護は將に絕えなんとす、然れ共靈寂より醒めなば我には當位即妙不改本位の軍略あり、蚊軍何ぞ恐るゝに足らん、」斯の如きの梵音城內に響き渡る。過つる昔本多佐渡守は小蚊一擊、敵の萬軍を退けしと聞く、打てよ毒蚊精血は自ら涌出せん、逃れよ彈丸、勝利は今なり。然らすば徒らに貧血病者と化し去らんのみ。

記事

各地の思想戰

○京都大阪地方

△**總本山門前布教**　妙滿寺に於ける思想善導門前布教は、回を重ぬること三十五回、聽衆延人員一萬七千五百名にして、多大の反響ありたり。

△**顯本健兒會發會式**　九月十一日、妙滿寺講堂に於て發會式を擧く、集まれる少年少女約六百名、村岡師開會を宣し、萩原清子孃のオルガン君が代、男子部及女子部總代の祝文朗讀、萩原部長の祝辭、次に金光師の人と馬、熊見枚童氏の正直か虛欺かに就て有益なるお御噺ありて萬歲三唱に天地震慄し頗る盛況を呈せり。

△**龍口御法難會**　九月十二日、妙滿寺に於て、法要虔修後萩原本山部長の龍口御法難に就て講演あり。

△**二樂會發式會**　九月十二日本正寺に於て開催、「草木成佛の意義」村岡本量師、「宗教の本質及其屬性」有田宏道師、「日蓮上人の人格及教義其一」金光布教師、「法華經の眞髓」萩原僧正、熱心なる聽衆約百名ありき。

△**綾部に於ける講演會**　大本教本山の所在地綾部町了圓寺に於ては九月三日夜國友僧正を迎えて、日蓮主義講演會を開く。聽衆僅に五六十名。昔は布教と聞けば參詣の善男女本堂に充滿せしに、教導を怠る事兩三年にして此の衰頽を見る、とんだ所にて思想教化の蔑にすべからざる實證を見たり。加ふるに本講演會に對する住職の準備矢當を極め、講師の氏名すら公表を忘れたるが如し。昨秋は野口監督布教師の巡教を謝絕し、今は又此の暴擧あり、思想界紛糾混亂の極に達し、我等日蓮主義者の責務重且つ大を加ふる時、切に住職の反省を促す。

信仰の復活を祈る　　國友文學士

△**大阪府耳原の講演會**　本年五月本多大僧正祝下に請ふて思想問題大講演會を開催したる大坂府三島郡三島村に於ては、九月五日又國友僧正金光布教師を迎えて、耳原法華寺に於て教莚を布く。聽衆滿堂、何れも熱心に聽講し、感極つて泣くものあり。

生活の二方面　　金光孝碩師

信仰と新生活　　國友日斌師

△大阪市蓮成寺　九月四日講演會開催、聽衆約貳百名。

思想上より見たる尼港事件　京藤義應師

月愛の光　金光布教師

思想戰に對する準備　國友文學士

△堺市妙滿寺　九月六日講演會開催、聽衆の質と量に於て川崎住職平素の努力を想ふ。

聖者に何をか學ばん　金光孝碩師

人生の生活と宗教の信仰　國友日斌師

○名古屋の歩兵戰（第三回）

▲八月十七日　名古屋市新榮町常德寺に於て五關盆會施餓鬼法要を執行したるに因み左の講話あり。

報恩に就て　山內櫻溪氏

▲同十八日　名古屋市古渡町靈山寺に於て尼港殉難者の追悼法會並に講演會を開く、主催者は愛知縣下に於ける顯本法華宗聯合寺院にて、聽衆滿堂、左の講師順次に登壇し、多大の同情を喚起せしめたり。

尼港殉難之實況　佐藤新愛知記者

國民の覺醒を促す　國友日斌師

殉難者に對する責任　山內櫻溪氏

尼港事件に就て　丹羽陸軍少將

▲同十九日　名古屋市八百屋町妙行寺に於て盆會施餓鬼法要に因み左の講演あり。

信仰と妙力　國友日斌師

▲同廿日　名古屋市外南陽村小學校々堂に於て民力涵養講演會開催出席講師左の如し。

國民の覺醒を促す　國友日斌師

民力涵養と思想の關係　山內櫻溪氏

皇國の危機　加藤少將

▲九月七日　名古屋市八百屋町妙行寺に於て日蓮主義講演會開催聽衆滿堂。

立國の根本義　山內櫻溪氏

▲同八日　名古屋市外新川町日宗教會に於て日蓮主義講演會開催、出席講師左の如し。

法悅の生活　國友日斌師

成佛するまで　山內櫻溪氏

▲同九日　尾張一宮町歌舞伎座に於て民力涵養講演會開催、聽衆四百餘名出席講師左の如し。

須からく宗教に來れ　國友日斌師

思想界之維新　山內櫻溪氏

感動一回毎に度を增し、舌鋒師皆を刺ぐるものあり、新教田開拓の効果漸次見るべきものあらんとす、努力々々多々益々努力の外あるべからず。

▲同十日　名古屋古渡町靈山寺に於て日蓮主義講演會開催。

信仰と妙力　國友日斌師

差別と平等の關係　山內櫻溪氏

○神戸姫路地方

△八月二日　神崎郡々教育會夏期講習會第二日（公會堂聽衆四百餘）午前八時より十二時に至る前後二回。

思想問題と日本文明　中川文學士

△同　日　午後三時より同郡尼港追悼講演會に於て

尼港事件と國民教化　中川文學士

△八月四日　姫路市東部青年團は聯合して時代の智識啓發に資せんとし、教育家側と提携成り、城東小學校に於て三日間開催、第二日

現今の思想問題　中川文學士

△八月七日　赤穗郡上郡法王會主催、日蓮主義講演會を公會堂に開く、聽衆六百余。

國民教化と日蓮主義　中川文學士

△八月十一日　姫路三十七聯隊將卒の爲に（千二百）

教の力　中川文學士

△八月十九日　明石公會堂に於て橘香會主催日蓮主義講演會（聽衆五百名）

精神修養と日蓮主義　川崎布教師

混亂の巷に立ちて　中川文學士

△八月廿日　姫路本町幼稚園講堂に於て日蓮主義大講演會開催（聽衆滿堂）

日蓮上人と鎭山陽　大河原當志氏

國家的信念の基礎　矢部事正師

明教樹立の秋　吉永日洋師

△八月廿六日　姫路市內神谷町川西當吉氏宅に於て日蓮主義公開講演會開催、聽衆路に溢る。

信仰の力用　大河原當志氏

日蓮聖人の社會觀　中川日史師

△八月廿九日　姫路三十九聯隊將卒の爲に（八百餘）

軍人の覺悟　吉永日洋師

△九月一日　市內大野町萩原氏宅公開日蓮主義講演會開

催（聽衆滿堂）

過渡期の思想界と其波り　吉永日洋師

△九月五日　神戸布教所に於て日蓮主義大講演會開催。殘暑殊に酷しく、堪え難かりしにもかゝはらず、聽衆滿堂、屋外に溢れ、窓下に立てり。

思想界の輸入超過　吉永日洋師

光と信仰　金光布教師

一　國民覺醒の秋　國友文學士

△九月六日　姫路市内三浦幸作氏宅に於て

久遠の背景より　吉永日洋師

△九月六日　神戸市東神倉庫社員大野法學士山本篤一郎氏等の發起にて、同社内共友倶樂部に於て、熊井本光師を請じ、佛教大經講義會を開催す、聽講者は同社員等數十名あり、引續き毎日曜日夜開講する筈なり。

△九月十一日　飾磨郡庄村八杉常松氏宅日蓮主義宣傳

正しき信仰の力　大河原當志氏

強き人と強き國　矢部事正師

△九月十二日　姫路市妙善寺に於て姫路教團合同日蓮大聖人龍口御法難紀念大講演會開會。

受持正行　矢部事正師

龍口法難と感激の精神　吉永日洋師

△九月十二日　夜明石國乘寺に於て龍口六百五十年紀念會講演會を催す市長三輪氏の令息にして醫を以て業とせる三輪篤太郎氏は熱心なる鑽仰家たりしが愈々宣傳の戰士たるへく登壇し熱誠道を說けり。

これ程の喜　三輪篤太郎氏

偉なる說日蓮聖人　川崎英照師

△九月十三日　加西郡九會村後藤常八氏宅に於て。

弘法の三軌　矢部事正師

△神戸の道路傳道軍　神戸市の青年道路軍は潮の滿つるが如く、彌々魔軍を窮地に壓迫せり。即ち七八兩月の毎火曜日には、神戸三ノ宮神社境外にて、神戸青年會の牧忠馬、保田太一郎、內田周二、林重太郎、下里尙一、吉田又治、山口智光等の諸戰士を中心として、御影青年會の栗原民男、田邊藤二、三井三吾、高島直彦の諸氏援軍として之に參加し、又大野法學士、太田敬一、山本篤一郎等の諸將も時に馳せ參じて之を督勵するあり、戰ひ愈酣ならんとす。果然障害は來れり、同神社境內の露店商人等は、我戰士の師子吼に買客を奪はるゝに、商賣出來ずとて結束して交番所に訴へ及直接我が軍に交渉し、他へ交戰地を變更せられたしと申出でたり。されど何ぞソレシキの事に辟易してたまるべき、直に警察本署に交渉して其の了解を得たるも、武士の情として、時間を見計ひ、且つ道路通行の妨害にならざる樣に警備隊を配置して勇戰益ゝ努めつゝあり。

△神戸のはちす婦人會　第二回講話會を八月八日午後二時より統一團神戸支部に於て開く。

感激の生活　西宮稅務署長　三崎庸氏

日蓮上人の婦人觀　熊井本光師

第三回講話會を九月十二日午後二時より統一團神戸支部に於て開く。

婦人と信仰　文學士　佐藤重賢氏

佛陀の婦人訓(二)　熊井本光師

創立以來日尙淺きにも係らず、日に月に會員の增加を見、殊に九月の例會の如きは會員外の來聽者も多く、堂に溢るゝばかり、師訐をついて出る唱題の聲は、道行く人をして思はず歩を止め、說法禮拜せしめたり。

△神戸の日蓮主義青年會　熊井講師大車輪になつて奮闘するに、聽講者益熱誠の度を增し、入會者又漸次數を加へつゝあり。七八兩月の暑中にも休講せずして報恩鈔を講了し、九月一日よりは立正宗國論の講義を開始せる由。

○北都金澤地方

△七月廿一日　本覺寺益施餓鬼法會

即身成佛　石橋會章師

不惜身命　窪田純榮師

△七月廿二日　本長寺益施餓鬼法會

妙蓮益經に就て　石橋會章師

月上女經に就て　窪田純榮師

△七月廿六日　本長寺內天晴會

法華經の行者　石橋會章師

大本敎に就て　吉倉水夫氏

大聖御傳續講　小島由之助氏

壽量の本佛　窪田純榮師

△七月廿八日　本行寺益施餓鬼法會

受持法華名者　窪田純榮師

遣使還告　石橋會章師

△八月四日　國友惟正來澤本長寺に於て開筵折惡く大風雨なりしも意外の來聽者ありたり。

開會の辭　窪田純榮師

懺悔と實生活　國友日斌師

△八月十六日　能美郡根上り村本成寺
我宗の安心　石橋會章師
信仰と實感　窪田純榮師
△八月廿二日　本長寺例月講演　窪田純榮師
宿縁深厚
△八月十九日　能美郡根上り村伴田伊助宅
無限の生命　窪田純榮師
△八月廿六日　本長寺内天晴會
成佛の要諦　石橋會章師
壽量の本佛其三　窪田純榮師

何れも盛會にて、殊に來會者は純信の士女のみにして有象無象の妄信者なく、堅實に且つ徐々に發展しつゝあり。就中金澤天晴會は毎會來聽者の數を增加し、加ふるに何れも有識階級の聽衆なれば、各講師の努力と相俟つて、將來北陸の天地に偉大なる結果を見るは疑を容るゝ餘地なく、大法宣傳の爲に慶賀すべき狀況なり。

○宇都宮地方

△八月二十日　宇都宮市中央會堂旭日館に於て、聽衆四百五十名。
日蓮主義の權威　野澤少將
△八月二十日　氏家町高等小學校講堂にて開會、聽衆三百名。
帝國の前途と將來　野澤少將

○北海道江別町

△八月十六日　江別町法華寺に盂蘭盆施餓鬼法要並に講演
三寶の恩　田久保日城師

同日午後七時より江別河畔に祭壇を設け、尺角丈餘の卒塔婆を建立し、田久保日城師導師として河施餓鬼を修行す。本年は毎歲の恒例なる燈籠流しを廢し、盛なる仕掛煙火、打揚げ煙花等數十發を打揚げ、水難病死諸精靈の爲め莊嚴なる法會を修せり。此の盛大なる催を見んとして參集せし群衆、千歲橋及末廣神社境内に溢れ、其數無慮壹萬と稱せられ、孰も發歡喜心ならざるは無かりき。

八月中の巡回教化

□—八月六日淺草町少年樂園に於て同園及勞働館經營者建部岩一郎氏の依頼に依り開催、壹小供會百五十名、森師川島松雄、大池慈海、夜大人會二百五十名、講師高木日靖、笹川日堂、餘興講談桃川蝶花。□—八月十日品川獵師町魚市場壹小供會百名、川島松雄、高木日靖。夜大人會百名、高木日靖、川島松雄、野澤少將。餘興桃川蝶花。此夜豪雨に加ふるに雷電烈しく、處は品川灣に臨める海岸の事とて、怒濤の石垣に打ち寄する音物凄く、昔大上人が龍の口に首切られんとせし夕もかくやと思はる、大西郷のやうに肥滿せる身體の持主蝶花君も、此夜許りは恐しかつたと見へ、講談もしどろもどろになつて休憩室へと逃け込んだ、されど流石に野澤少將は、一時間餘に亘つて、一、生命の永續、二、因果の法則、三、佛性あるを信ずる事等を詳論し、聽衆は風雨を忘れて最後まで謹聽した。□—八月十一日同所壹小供會百五十名、溝口會旭、川島松雄、高木日靖、夜大人會三百名、川島松雄、野口日主、餘興桃川蝶花。□—八月十四日大森町妙道會の依頼に依り同所に於て開催、壹小供會二百五十名、川島松雄、中村藤吉、高木日靖、夜大人會四百名、中村藤吉、高木日靖、笹川日堂、餘興桃川蝶花。□—八月十五日同所、壹小供會三百名、中村藤吉、溝口會旭、川島松雄、夜大人會六百名、高木日靖、小原少將、餘興桃川蝶北。妙道會幹部、大原亮、木村肇、西山喜太郎氏等は熱心に奔走して非常なる助力を與へられたり。□—八月廿三日淺草田中町、壹小供會二百五十名、川島松雄、中村藤吉、夜大人會三百名、高木日靖、國友部長、餘興桃川蝶花。□—八月廿四日同所、壹小供會二百五十名、川島松雄、高木日靖、夜大人會三百名、高木日靖、關田日城、餘興桃川蝶花。□—八月廿六日南千住、壹小供會二百名、川島松雄、夜大人會二百五十名、高木日靖、國友部長、餘興桃川蝶花。□—八月廿七日同所、壹小供會三百名、高木日靖、川島松雄、夜大人會三百名、高木日靖、野口日主、餘興桃川蝶花。（川島松雄）

統一閣月報

○日曜講演七月十一日、日蓮主義青年の叫び、川島松雄、唱題の二面　妹尾義郎、聖德太子の憲法に就て　木多日生。十八日、暑中に付き午後七時より開講、新轉につき高木日靖　日蓮主義より觀たる血、野口日主、大日本國民の使命、山内櫻溪。二十五日、同情と人生　妹尾義郎、佛教處生觀　大森日榮、思想界の動王論　山内櫻溪。八月一日現代を醫すべき日蓮の言行　笹川日堂、人生とは何ぞや　野澤少將。八日、日蓮主義より觀たる根本善人　妹尾義郎、法華經と國體觀　木村日保、玄妙日什　井村日咸。十五日、娑婆即寂光の理想、木村義明、如說修行鈔につき、森川日修。二十二日、迷信の根枝を斷滅せよ、高木日靖、國民の自覺　國友日斌、唱題正行　野口日主。

○子供會は七月十八日に閉會暑中休暇とする。

○統一閣所屬各區夜講は如例。

日蓮主義的解決

本多日生先生新著

思想問題の歸結と法華經

我國現時の生活問題、勞働問題、政治問題等は、單に之を部分的に解決せんとするも、眞に能く爲し得らるゝものに非ず。必ずや、哲學、宗教等最も高き處に立脚して、根柢的に人類文明に對する批判を爲し、然る後、かゝる枝葉の問題をそれ〴〵解決する所なかるべからず。今、本書は著者が平生の立脚地より、先づ思想問題の歸結的解決を與へ、而して生活問題、勞働問題、政治問題等を始めとし、現下の有らゆる、切要なる諸問題を正々堂々と批判斷定し、以て我國民をして一大安立をなさしめん爲に、特に筆を呵して成されたるものなり。形や小なりと雖も、價値や正に論を俟たざるなり。

洋裝四六判
上製全一冊
正價金貳圓
送料金十二錢

發兌　東京振替　神田區東北神保町五　神田座　弘道館

廣告

謹告

炎暑の候各位御清榮奉賀候　陳者先般當閣增築營繕資金壹萬圓を勸募致候處、續々四方の諸賢より御申込有之、既に申込額は九千二百七十六圓に相達し、現金收納約三千圓を計上仕候。日下諸物價も低落致來候故近々着工致度所存に候。就ては同じくは此聖業をして可成廣く多くの御信者と妙緣を結んで大法廣布の堅き血脈たらしめ度存候まゝ金額の多少に由らず進んで御喜捨被成下其御功德に依つて一日も速に法城を莊嚴し自他の佛事を成滿せしめられんことを念願仕候。

大正九年七月十八日

統一閣增築係一同

各位

目次

日蓮主義と實際問題（時言）……本多日生
一、日蓮主義と國體來……二、國民自覺の內容……三、國民の自覺と哲學……四、國民の自覺と倫理……五、國民の自覺と宗教……六、國民の自覺と國家觀……七、國民の自覺と社會觀……八、國民の自覺と文明觀……九、精神生活の高調……一〇、日蓮主義と國體擁護……一一、日蓮主義と蒙古來……一二、一心協力と自由……一三、日蓮主義の教化
聖德太子の憲法に就て……本多日生
世の中と佛教……野澤悟吾
佛教信仰の正統……本多日生
迷信を排す……本多日生
人生問題と精神生活……本多日生
日蓮聖人教義綱要……井村日成
私の婦人觀……安西千賀夫
記事、報道十數件

第廿四年十一月號

統一第三百七號　明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可　大正九年十一月二十四日第三種郵便物認可　發行所東京市品川町品川四百十二　發行人　（本誌定價一部）

謹告

時代の要求に鑑み、法國の爲め貢献仕り度今回統一團名古屋支部豐橋分會を創立し、十月十五日を以て豐橋市清水妙圓寺に於て、總裁本多日生猊下の親臨を仰いて、發會式並に大講演會を開催仕候條、大方の同志諸君に於ては、何卒祝辭又は祝電を寄せて本分會の前途に聲援を與へられ度茲に統一誌上に於て懇願候也

大正九年九月
豐橋市清水妙圓寺
統一團名古屋支部
豐橋分會創立事務所

思想の惡化善化
人類文明の基礎
正しき理解と信念
各一部金六錢百部以上五錢の割送料一部金貳錢
本多大僧正撰
法華經要文
一部定價金參拾錢
並製金五拾錢
上製金四錢

本多日生師著書一覽

○法華經の心髓　壹圓六拾錢
○日蓮主義の運用　金壹圓八拾錢
○聖訓要義　卷一、二、三、四、五既刊、壹部金壹圓七拾錢　卷六壹部金參圓
○開目鈔詳解　上卷一部　金貳圓
○聖語錄　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の初步　金七拾錢
○東洋文明の權威　金壹圓八拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓各送料八錢
○法華經講義　上下上卷下卷各一部金參圓四拾錢送料金貳拾四錢　一部金參圓四拾錢十一卷完既刊送料一部十八錢半年前金送料不要
○大藏經要義
購讀希望の方は左記へ申込みなるべし
東京市外品川妙國寺內
大藏經要義刊行會　振替東京三一五九六番